女學雜誌

第二百九十八號
明治二十五年一月二日發兌

我は固執の名を甘んず　愛山生

新年附録

妾が父　客員すゞ子

余が母　社員山月子

人生に寄す　客員無名子

總撰擧準備中最大準備

侯爵と小公子の密圖

下六番町六番地
女學雜誌社

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 298. JANUARY 2ND. 1892.

EDITORIAL;—Most Important preparation for the Next General Election.

MISCELLANEOUS:—Frances, Willard in her Home; Sentiments expressed about the closing year (by Seven Girl Student. Modern higher Education of Women in Europe.

CHILDREN'S COLUMN:—Little Lord Fauntleroy.

LITERATURE:—Lady Litelati in Old Japan. (Mr. T. Owada).

SCIENCE:—Physical Temperature. (Mrs. N. Yoshida)

CONTRIBUTED:—Orthodoxy and So-called Jiyuha. (Mr. Y. Yamaji.)

NEWS.

NEW YEAR'S SAPPLEMENT.

My Dead Father. (G. S.)
My Dead Mother. (S. K.)
Human Life. (H. S.)

第二百九十八號目次

● 社説 總選擧準備中の最大準備

● 雜錄 フランセス、ウイラードを其家に訪ふの記○歳暮の感の答(明治女學校修身科問題)○欧州列國女子高等教育の近況

● 兒籃 小公子(若松しづ子)第十六回

● 文學 女性文學史(大和田建樹)

● 理學 いかにして体温は減少するや(吉田伸子)

● 寄書 吾は閑執の名か甘んず(愛山生)○一點星(叡文)透谷隠者

● 時事 同もに新年を迎ふ○新陳代謝此の年の知けん○年暮年頭に何をか思ふ○今后三月○正月遊び

● 附錄 新年附錄の序○父を失ひての后の追懷(すゞ子)○彼の一夜(山月子)○人生に寄す(無名氏)

恭賀新年

中島とし子　荻野ぎん子　吉田のぶ子　田邊たつ子　小島きよ子　若松しづ子　清水とよ子　松岡もと子

星野愼之輔　巖本善治　川合信水

堀口庄三　井上藤平　野綜愛助　櫻井昌好　鈴木半藏


猶興舍亞鉛版

明治廿五年中の女學雜誌

女學雜誌の目的は、女性天稟の質を、家の內、國の中、天下列邦の間に、擴張するにあり。故に美術、道德、慈善、敎育、傳道、文學のたぐひを擴張するは、其本主旨にして、年來多少之に力を盡しぬ。左れば、此主旨に從つて、歲々年々、時に觸れ、折に適ふの記事を掲載し、些さか本誌世に存するの天職を盡すと信じぬ。今年も亦た、變りなく拮据すべし。固より、面白く、樂しくするは、其の得意の長處にはあらずと云へど、もし讀む人の多少の益とならば、其願ひ足れりと云ふべし。掲ぐる所、素より金玉のみにはあらずと云へど、何れも相應の苦心をもて編輯したるものと見そなわすべし。本年一歲の間だに、掲ぐべきもの、今豫しめ悉とく約する能わずとはいへど、大畧左に示すの類は、遠からざるうち、追々にして掲載すべし。他の社說、小說、兒籃、雜錄の類にして、年來の趣味を呈すべきは言ふ迄もなし。

本年中に掲載すべきもの、兒本

中島湘煙女史の詩想に富みたる隨時隨筆の感は機に觸れて隨感の欄內に現はるゝなるべし特に本年は「政治家の妻」と云如き題にて一文を草せられんとす**田邊花圃女史**は其流麗にして才華燦爛たる筆に小品綳錦の繡を織り成し、實際にして意想深き新小說幾卷を示さるべし特に本年は其の最とも親愛し玉ひける亡兄の事を追懷して「亡き兄」と云へる一文を草せらるべし。**跡見花蹊女史**が才學妙藝は普ねく人の知る所ろなれどそは何故にして斯くなれるや女子敎育と云へるものあらざりし世に何如にして女史の如き人出でしやと思ひ其經歷を聞かんとする人多かるべし、女史は本年に於て「余が年少き時の勉學」と云へる題にて一文を草せらるべし。**ピアソン女史**は横濱二百十二番共立女學校の柱石にして二十年來日本の女子敎育に從事し熱心一意たゞ日本の女子の發達を希圖せらる、其の初め渡來せられしより今日に至る迄の經歷を追懷せば坐ろに多感多恨ならん、女史は本年中に「日本に來りしよりの追懷」と云へる一文を草して送らるべし。**ブース氏**は横濱百七十八番フェリス女學校の校長にて男宣敎師にして日本の女子敎育に身を全托したる最初の人なり、前年米國に歸休中、數万の金を募集し、遂に山手に巍々たる一大學館を新築し、追ては日本人の手に之を任せて自活自給の私立女學校と爲さんことを希圖せらる、此人日本の女子敎育に何如の說ありやは人の聞かんと欲する所なるべし、故に本年中に「日本婦人の敎育」と云へる一文を本誌に寄せらるを掲んとす**櫻井ちか女史**は櫻井女學校大坂一致女學校其他一二女學校の創立者にして創業の才幹に富み當今の女子敎育者中秀拔せる事務家なり、婦人の獨力を以て女學校を創立するは容易の事に非ず、其創業に關するの經歷を聞かば大ひに吾人を敎ゆるものあらんとす、女史は本年中に「女學校創立に關する余が經驗」の一文章を寄せらるべし。その他**女子師範學校初年の感**と題して、吉田仲子は、今の高等女子師範學校初年の景況を追懷し、今に合せて坐ろに昔を忍び、今昔の感一と方ならぬ思ひを寫さんとす。又**妹等が母**と題しては、矢嶋かち子、德富猪一郎氏の母、横井時雄氏の母、などの生母賢夫人の逸事を記し、寄送せられんとするものあり、又、女醫として初めて世に出でたる荻野吟女史**女醫となりし決心**と題する一文を投寄せらるべく**女武道**の說、女界の脩德に武道を用ひんとに熱心せらるる星野慎之輔氏の文を載せ編者も亦た折よくば、**紫式部**と**淸少納言**と題する一論文及**神功皇后論**並びに、**余が家の先人**などの文を公けにするとあるべし又**加賀の千代**に就きて少さか說あり希はくは世人

に問ふことを得ん、其他**妻が父デッキンス**の一文は小說家ヂッキンスが令嬢其父の言行性格を視察し之をいと綿密に書示したるもの又**母としてのグラッドストン夫人**は大政事家の妻グラッドストン夫人が何如に能く家を脩め子を育するかの美事を示し些さか偏僻にして實務に迂ときし女學生の參考に供えんとを欲す、その外**小公子**の作者バーネット夫人が「余が作者となりし由縁」と云へる自らの告白文は極めて有益なるべく、又た彼の大說教家の夫人が**妻が夫ビーチヨル氏**として其性行を極めて細やかに且つ公けに愛の情を以て書現はしたるものなど皆な本年の女學雜誌紙上に掲載せらるべし。其他、板垣伯が其母堂に付ての話。下田歌子女史が陛下の御徳に付ての話、小鹿島筆子女史が、佛蘭西留學中の感、加藤錦女史、及津田梅子女史が米國留學中の感など、何れも、早晩本紙上に於て談話を辱ふすべしと云へど、未だ今日明らかに預約すると能はず。此外、時に觸れ、折に際して、松に颯そよぎて聲を發し、岩に水うちて鼓の鳴るが如く、時々節々に激して玉ちる所ろの金玉は、今必らずしも一々預告するとを要せず。たゞ、其大方を示さんとて、少し許りの見本の題を擧たりとは云ふ。

女學雜誌(毎週土曜日)極早朝四方發送
一册定價六錢、郵稅五厘、府內無稅
十册前金五十八錢、郵稅共六十三錢。
半年分前金、府內は一圓四十三錢、府外一圓五十六錢
一年分前金、府內は二圓六十錢、府外は二圓八十六錢
廣告は一行十錢宛、不德義の廣告は謝絕す。

東京市下六番町六番地

女學雜誌社

女學雜誌社の喜こびて爲す仕事

一　女學に關する書物類の賣捌取次並びに出版の方法
　但し直接女學に關せざるものにても亦相談するとあるべし

一　教育、傳道、慈善、看病、美術、文學、社會改良、などの仕事に對し、出來べき丈の助力を爲す事、並びに吾社の主義に合する限り、女學雜誌を共通信上の器關となす事

一　目的、身の上、其他一切の事に付ての相談質問に應ずる事

一　女教師の世話、奉公人雇ひ及雇はれの交詢案內などの事

此他、大抵此等の告白によりて推知するとを得べき同類の仕事。

每月一回「女學生」を發行す、多數の女學校の女學生が共同編輯する所ろのもの也。一册郵稅共六錢。

每月一回「通信女學講義錄」を發行す、晚學の婦人家にありて獨學するに足る講義錄也。一册郵稅共三十二錢、一年にて卒業の事。

女學雜誌社

女學雜誌 第二百九十八號 明治二十五年一月二日發兌

社說

總撰擧準備中の最大準備

大勢は人を促がし、其止みがたき形情の下に屈服せしむ。稱して民黨と云へりしもの、些々たる經歷に拘らひ、改進と自由との名目をして相敵視せしむるの怪事を現ぜしに、是れも亦久しく其醜を續くること能はず。一世に表出し、高く構えて超然の內閣を組織すと云へりしもの、富岳が千古秀麗の白雪巓を黑雲漠々の中より卓出するが如き觀あらしむることを得ず、是れも亦た明白なる薩長內閣と號すべき眞相を顯はし來りぬ。夫れ、波に漂よふべき木の葉は、流に隨つて何れの方向にも歸着せずんばあらず、屹たる斷岸の万古動かざるが如きを望むこと能はず。

第一期の帝國議會は、喧騷囂々の中に畢りたり、然れども、其敎訓は經驗の中に存して、非尋常の益を與へ、第二期帝國議會の戰狀は驚ろくべきの進步を示しぬ。官黨、民黨、の陣立あが〱に見事なりき。

今の政府は、三百議員の總反對を目擊したり。是れ民の聲にもて、民はわれ政府を信ぜずと覺り、天命を懼れて恐惶、高く踏み勇み退ぞくほどの君子にもあらず。さりとて、直ちに之に降伏し、即刻、兜を脫いで軍門に降らんとには、其意氣地餘りに强過ぎたり、其の自己を知らざること餘りに暗過たり、民間の實情を知らざることも亦餘りに多過ぎる也。

止を得ざるの結果として、議員解散となりぬ。今后二三ヶ月の間だに、總撰擧あらんとす。次官書記官は言ふに及ばず、大臣も馬を出さんとすと吹聽す。民間の諸黨は、成べく、協和一致し味方同士打をせざらんと約しぬ。而して、板垣、大隈の二勇將は、今や猛然として立んとせり。

之れ實に尤ともなることにして、而して亦喜ばしきことなり。旣に議院政治を開きたる以上は、固より此程の事なかる可らず、もし此程の事だになくんば、寧しろ立憲政治を施行するに及ばざるべし。

今や、政府は超然內閣の行はれがたきことを知りぬ、民間黨は小派分裂の賴みがたなきことを知りぬ、一と年の喧しかりける

一

議會と、不幸短命なる今年の議會と、既に能く此の二つの敎を與へたりとせば、其効能少なかりしと云ふ可からず。

然れども、此他に、政府も、議會も、議員自身も、各撰擧區の投票者も、もろともに深く經驗覺悟することを得たる一大事のあるあり、此の大事は、政黨の一消一長、內閣の一進一退などに比ふべき些細の末事とは異なる。

夫れ、議場にて痛快なる議論を吐き、折々政府委員を困らせ、時に寒心すべき質問書を提出する議員は、必らずしも豪骨屈しがたきの偉男兒にはあらず、黃金を以て之を裝ふに、思ひの外に早替りす、否な早替りすることの容易きのみにはあらず、腹中既に變り、而して口に痛快なる議論の風を吹出すものなきにしもあらず。

政費を節減せん、地租を引下んなど宣言したる言の葉は、飛鳥川の流の如く、去つて復た返らず、腕を扼ばりて慷慨鄉關を出でたる志士の腸は、存外に腐れ易く、調法の口の上の契約は、輕々しく賴むまじきものと分りたり。

たゞ手強きは、外貌夫人の如くにして、胸に屈撓す可らざるの神勇を奮はふる君子にてあるなり、彼れ容易すく口を開かず、輕々しく政府委員を攻擊せず、たとひ薩長の勳功を小供らしく演說するものありとも、腹を立つほどに激することもなし、大喝一聲は、薪を割る音にひとし、細くとも蚊の鳴く聲に耳を聳だて、生平、沈々として慨せず、居常溫雅にして迫らず、たゞ夫れ一朝大事件大問題に臨み來れば、千百万雷頭上に落下爆裂すとも、絲毫も逡巡せず、百斤の黃金を見ること塵芥の如く、新聞の評判を聞くこと子僧の寢言に於けるが如き人士こそ、上も下も、橫も、竪も、皆な、畏縮し、信任し、敬重する所ろの人士あれ。

一回半の議院戰略中、心あるものは深く此一事を悟りぬ、云く、有德の君子ならずんば、之を敵にして恐るゝに足らず、之を味方にして喜こぶに足らず、此の人を得るにあらずんば、到底大事件を成し遂ぐること能はず、辨說は代つて辨ぜしむることを得べし、草案は代つて書かしむることを得べし、たゞ此の人を得ずんば共に盟約するに堪へずと。而して、此感は、政府及び議員中に存するのみに非ず、各區の撰擧者も亦深く此事を經驗したり。

故に、議員の撰擧には、才辨、學識の上に、更に一の切要な

る資格を求め考へずんばある可らず。改進派の人は云く、智識、財産、名譽と、未だ可ならず。自由派の人は云く、氣概、勇氣、個人自由主義と、亦未だ可ならず。此の外、更に一大緊要のものあり、即はち、議員たるもの丶、德義節操、是れ也。

德義節操は、其人の心靈なり、即はち其人の人たる中心なり、此より以外、才辨、學識、名譽、財産、氣概、自由論の如きは、必竟些々たる添加物たるに過ぎず、之を如何にとも變用し、何れの道にも流通することを得べし、人は此等添加物の故を以て獨自一己を爲さず、人の人たるは即はち其中心の節操德義に存す。

故に、今回の總撰擧には、先づ正しき人、操ある人を撰擧すべし、學識、才辨は抑そも末なり。之を顧みず、もし才辨の故によりて撰まば、議場內に豆藏の如き才辨は聞くことを得ん、凜烈たる高德煥發する大痛論を聞くことを得ず、もし學識の故によりて撰まば、ウエブストル字書の如き博識の說は聞くことを得ん、不屈不撓正々堂々たる大正策を聞くことを得ず。茄子の種は茄子を生じ、無花果の木は無花果を結ぶ、初めに、有德の人を擧げずして、而して議場に有德の君子あることを望むべけんや。

第一回の撰擧に際しては、吾人幾度か此事を論明したり、而して世人は多く之を迂なりとせり。而も一回半の議會の景況は、明らかに吾人が前言の當れることを自證したるに非ずや。凡そ道德に適はざる處作は、幾度くり返すとも只だ同じきことを繰返すのみ。日の下に斯して新しきことなし。人世五十、何の暇まありてか、か丶る無用無効の事に一生を空費せん。道德論を迂なりとするの人は、即はち尤とも實際に迂なるものなり、道は四方に存し、到る所ろ常理を明らかに示す。

今や世人幾分か此理を覺りたり、此度の總撰擧には、幾分か多く吾黨の言葉に耳を傾むくるならん。何の政黨にも關せず、何れの政派にも偏せざる吾黨の如きものは、此理を說示するに頗ぶる恰適す。是れ、吾黨の任なり。以後三月、吾黨は之が爲めに大ひに努力せずんばある可らず。

雜録

万國婦人禁酒會々頭

フランセス、ウイラードを訪の記

余曾て「エバンストン」に赴きてウイラードを其「清閑亭」に訪れしことありしが結搆澹洒にして亭前の緑楡殊にめでたく清閑幽逸の風趣いはん方なかりし始て「シカゴ」婦人禁酒會に相見しとき余は先づ女史の謙讓博識にして大量なるを悦びしが其家に招かれて、とうとき母堂の天姿に接し渠等の殷勤なる談話を聽て其たのしきさまを忘るゝとなし。女史曾て「エバンストン」女學院に熱情の教諭なりしが今は世の禁酒界に覇者として其企圖いづこに終るといふことを知らず夫れシヤフツベリー侯は廿年あまり小童勞役場に反對して運動をおし暗澹たる山坑の下もしくは窒息せる陋室の内小童を酷使する慘狀を世に告げて、くり返し〳〵其饑渇劇勞に迫りいとけなふして鬼籍に入ることを警醒するに果は英國の人之を聞くに飽く迄とはなりぬ、されば侯の事業は何時といふ可きやと人の問ひしに斯害毒の除かるゝ迄は底止するの期あらずといひけるとかやウイラードは今日之に等しき答をなせり。

酒を賣るものは丈夫を奴隸に下し子女を廢物となすといふ、左れど其警語は今や人の耳に慣れたり上下の社會は禁酒家のいふところ多く當時の習慣に關係あるを見て其議論に好意を示さゞることあり女子が道德の問題に喙を容るゝはよからずとて當路の要吏と雖も之を聞くに吝なるものあり然れども斯害毒の鑿除せられざる中は禁酒の事業豈底止すべきものならんや初め禁酒事業の起りしは「オハヨウ」の一少都邑にてありしも直に「チヤウトーカ」に於る團結の組織となりて遂には天下到る處に婦女子の大連合を生じたり毎年文書を刊行すること幾百萬頁隊伍東西の環輿に遊説し「シカゴ」に禁酒會館を建て禁酒病院といふものを築きこゝに酒氣を用ゐずして病める者の治療をなすといふ禁酒事業は學校教會其他到る處に運動せざるはなし。

そも〳〵かゝる禁酒事業の決果は如何なりや爰に余は先づ英國「マンチエスター」の有志七人が爲せる事業を想起せずんばあらず見よや麥作枯槁して賦税徒に重き時に當り有志七人一室に會し其人數の少焉なることを人に知られじと赤幕を其

室の外に張りしが若干もなく年少雄辨にして熱情の士なるジヨン、ブライト其列に加はりリチヤード、コブデンと共に日夜野外に演説を試み或は學校に痛論し遂には劇場に於て公議を陳ずるに國會議員は之を嘲て曰く穀物條例を廢せんとするは是國を覆へすよりも難しと、されどブライト、コブデンは囂々の物議に對して其説を主張することを終始異ならず遂に人民の大群は穀物條例廢止の旌旗を長風に翻へし辨士の絶叫を聽かんとて東西より市中に類聚するもの十万のうへにものぼりぬ總理大臣ピールは穀物條例を維持せんとて千八百四十一年其職に就きしも衆望の禁じ難きを見て印綬を解けり。

見よ「チヤトーカ」に於る婦人の禁酒少團躰は穀物條例に於る「マンチエスター」の有志にあらずや婦人基督敎徒禁酒會は會員忽ち萬を以て數ふるに至りぬ而して其中多くは家を治め其中心となるものなりけり。

思ふにウイラード女史は禁酒黨中のジヨン、ブライトなる哉女史雄辨眞率其畢生の目的とするところは酒鬼を鞭撻して婦女子の位置を高ふするにあり凡そ大集會のある毎に女史は各所の大學を女子の爲に開かしめんと主張せざるはなく米國「ケンブリツジ」に於るミス、フオーセツト及び英國「ケンブリツジ」に於るミス、リードの成效を祝せざることなし女史又勞働問題を婦女子の前に提出して貧民塗炭の困狀を述ぶ「アトランタ」大集會の日に當り其最後の演舌に於て衆に告て曰く世に婚姻の筵には「オルチツド」を採聚して一段の粧飾をなすことあり然も其一枝の價を問ふに花嫁の衣服を縫へる菜色の孤婦が一年に得るところよりも多しといへり又は席上金銀の調度と雖も裏屋に侘住ふ二百の家々が一年に費すところより高しといへり夫れ基督敎徒たるもの資本の枝に國の華を開かしめ億兆黎民の屋頭に之を飾るの心なくして協はんや今資本は結合の價値を示すものなり勞働と雖も其境を出でざればこゝに戰ふとき信徒の記臆す可きは多數の善といふものなるべしとぞ。

女史の禁酒事業に入れる初十年間は一年一万五千里より二万里迄も旅行をなし平均一日一會に臨みたりき特に千八百八十三年には三十八國並に九州の山川を踏み到るところに女子禁酒會を建てたりといへり曾て三百金を國民禁酒會に致さんとせしに受けられず之を用ゐて母子二十五年のあいだ住慣し故

家「淸閑亭」を改むるに用ゐたりき。
婦人禁酒家又千金を出して女史の爲に書院を作れり壁上には寫眞丹青の數を掲げ書史新聞枚擧すべからず女史日々業をこゝに執る其藏するところ古代の紡機の如きは珍重斜ならずといふ女史晨起七時より七時半迄を出でずそれより九時半に至る迄は人を避けて終日活動の靈機を天に仰ぐ其絶倫の風骨もと此間より涌くものなり朝餐を畢りて茶を啜る迄大凡八時間此間を以て讀書勤務の時とし日暮れて晩餐をなせば又敢て勞作に從事せず斯の如くにして其生涯の健全と心神の爽快とを得るといふ。
女史が書齋の壁間ダンテの句を掲ぐ、

きはめて光陰をゝしもんずるものは空にこれをついやすことをゝしむ。

されど其慈愛の心胸を開いて一年大率二万の信書に接し一として親切に返書を認めざるはなし人に對して其言を聞くの暇なきときは文にして示せといふ常に人に告て曰くおのれは如何にもして人と共に禁酒の事業に盡さんと思ふ蓋しおのれの許に書を遣し蕪辭の返酬を拔くはあはれむ可きものを喜ばすのはしともなりなむ焉ぞ力を竭して自他を慰めざらんやと。
「淸閑亭」には三四の書記ありて印刷のわざに忙し十五年の間女史の爲に秘書の勞を執れるミス、アナ、ゴルドンは聰明にして瀟洒なり亭内に一室を有して泊如たる風興を愉めり、「淸閑亭」裡賞玩すべき奇物亦鮮しとせず埃及希臘の右、日本書畫帖其他舊社の墨跡などくさ〳〵あり。
ウイラードが衆人の上に立ちて統御其宜しきを得るの實あること多きが中に女史は性極めて活達なりされど婦人禁酒の事業に反目するものあれば女史之を評はず退いて其德操を以て之を服す女史又他の婦人に對して親愛を旨とし其企圖を成就せしめ心胸を捧げて之を踈く人と交るに當り女史敢て他の非を言はず同心多年にして人の惡を語りしを聞かずといふ其人を撫するに當ては嚴毅なる威風のうちに天眞優婉の情を寄するとなん、於、「淸閑亭」の名むしろ「切々亭」といふに其實を得たるものならんか。

ボルトン女史 原記
島 さ き 譯

歳暮の感

明治女學校普通科三年生（高等小學卒業后三年級）に年末修身問題として三の問を出す。汝が志望を告よ、孤女を憫れむ、など云ふあり。此に掲ぐる題は其一なり。之に答へたるもの多きうちより、六つ七つを抜き其儘にして示す。

（其一）

實に光陰は矢の如し日月星霜の流るゝは水の流るゝに似たりと古人の言も實に空言にはあらず今年もいつしか過去りて早や梅香のかんばしき新年をむかへんとす市街を過ぐれば道行く人さへ忙しげに準備一方ならず我等此際に當りて思出らる年毎に今年こそ清く此の一年を送らんと心にちかひ漸く暮れんとするに當りかへり見れば悔悟する事少なからず又思ふ來る年よりは必ずかへり見て恥ることなく清く暮さんと心に誓ひ又暮れんとするに當り一年の行跡を見るになほ先つ年の如しこれ幾度なすも心に恥ることなきを得ず嗚呼何故に斯くは汚れにそみ易きぞと自ら責めて熟ら〱考ふるも過まり〱日の下に新あることなしと此の時なるものも限りなく永遠に續くものなり此の一年二年を限るは唯便利より分ちしのみ人皆新なる日を一日も受けざるはなしもし毎日毎時新なる年に遇ふの覺悟あらんには心を清く保つことを得んと。

（其二）

流れて早き此の月日を今日と過ぎ昨日と暮し世事繁雜なる中に鞅掌して此に明治廿四年の歳暮を迎へたり然れども學事繁きを以て常に心中亂れ居りしが今や漸く試驗も略ぼ濟み精神靜かなるのときに及びて歳暮の感甚だ切になりたり嗚呼此の矢の如き誠に速なる日月なれども其速かなる一歳の内に於て如何に多くの變事のあることよ即ち今年は彼の大地震あり人心皆戰々競々となし或はわが親子兄弟を慕ひ悲嘆沈むもあり或は其尤も尊び且つ信じ以て依賴し來りたる父母を失ひて路頭に迷ふの多くの孤子あり或は甚だ見に慘しき怪我をなし生ながら世人の言へる地獄の責めに遇ひ居るものあらん或は市中を見れば各自繁忙なる狀をなし或は道ゆく童すらも甚だ忙がはしき有樣なり幼き子供らは新衣の成れるを喜こび或は新年の來れるを樂しみつゝ暮し居れり然ども退きて獨り悲しむ嗚呼我身を顧れば我身はいかゝなりしか思へばたゝ忙然として何の進歩もなし況や社會の益となりたる事業は少もなく只小屋に閉居して暮し年は病苦に攻められ彼の震災の起り諸姉妹慈善に働くの時機をも我身は病苦に打勝たれて夢中に經過し

當今漸く恢復の幸を得たるを以て今迄の埋合せに切に慈善に力の及ぶかぎりは盡さんと思ひしも種々なる事情より思ひつつ因循に附し恰も秦人越人の肥瘠を見るが如き有様なりと甚だ悲む嗚呼我も同じく人なるに彼は此の心に富み汲々此の事に從事するに均しく人にして我は如何なればかく冷淡なるやと思ふて此に至ればたゞ悲嘆の念に閉さるゝのみ即ち只道德の心進歩せず善を樂しむの心切ならざるを一向に悲しく感ずるのみ然れども既往の事は已に悔ゆとも益なし唯今よりは成し得る丈け善をなすを樂とするの心を養はんとを切に望むのみこれ歳暮の一感なるのみ他事は種々複雜なる感情にて又筆記す可きものなし故に尤切に感ずる所を述べしのみ。

（其三）

父なきものゝ母なれば人により一層に深きめぐみもて我れを學びの庭に送られし以來年は歳に改むれどわが智識は年とゝもに改まると能はずせめて母の望みの若干なりとも遂げんと思へども我身の注意の足らざる故か池の藻屑のその如く兎角に動く心地して春を過ぎ夏を越へ再び來る此の歳暮何をもたとへん心地ぞするさいわひ太平の御代に生れたる民は亂に會はざれは其太平のいと感謝すべきを知らざれば神は必ず此歳暮をもて我が怠りし心をさまし賜ふるべしと思いてよく〳〵母のめぐみを感じつゝ。

（其四）

妹此一年の末に至り熟々此一年中に於て爲せしとを考ふる時は實に其なせしと一として眞理に適せず只空漠なる事にのみ日月を費やせしとを想ひ天父に對し何の面目あらんやそれ一年の初めに於てはまづ此の年中を誠に淸く神の御心の儘に送らんとを祈り且つ願ふ然しながら翻へつて年末に至れば其己が希望するとの半ばも果さずして世上に吹く所の風と共になびき何の善行もなふして過ぎしとを考ふそれ花は年々相異り人は歳々同じきとをなすと古人の言ひしも實に道理ならん神我等を此世に置き給ふと偶然ならず已に其なすところあらしめんとてなり而るに我等其御心を行はざるは誠に眞理に背くなり凡そ人春に至れは其人々の樂むと共に愉々として送り夏をすぎ人世の尤も哀れを感ずる秋に於ては凡ての山川草木も共に哀れを告ぐるに似たり然れども凡自らを省るに適當なる時は歳暮にあり此時程深く省る時はなし故に我等望む所は此

年〳〵の歳暮の時に至りて己れの非を悔ひ亦來年に於ては同じきことをなさず悔ゆると共に改めつゝ進んで社會に益をなさんとのみを望まるものは如何とも云ふべからず當に來らんとする年を淸く送らんことを希ふ。

（其五）

鳥は其死せんをする時其鳴聲憐れなり人は死せんとするとき其心改まる妾今歳暮に際し大に過ぎこし方を省み此一年は過年に比較して幾許の道德理想高尙になりしかを考へ恐れ多く年の始めには必らず怠らず忠實に万事を勵み高く望まんと心掛くと雖人性の弱きがため何の効もなく天の與へ玉ふ月日を輕蔑し歳暮必らず悔改む妾此れ毎年の末には此感情胸に浮びて止まざる所ろなり安息日の夜靜かに三教場に至り自らの行爲を省む妾天性沈靜なる場所を好めば此所にて種々の感情を引起し此一年中友人に向て幾何程の眞愛を盡せしや又校內總ての人を一樣に愛し得ることの出來たりしや又敎師には何程柔順に仕へしや他人に向て幾許の善を施せしやと觀れば思ふ志の万分一もなすこと能はざりし此に至て愈〻心の弱點を覺るなり歳月は年々改まれど人は年〻古ぶとの愛する先生よりの御敎訓を思ひ出す度每に己れは天を仰ぎて恥ぢず又地に面して恥ぢざるの行を月日の廻り行くに伴ひて新たなる日を向ふ事と共に新たなる理性に伴ひ進み行かんと是れ妾が歳暮に到り熱望したることに侍る。

（其六）

我身國を出でしより早くも一年立にけり昨年の暮に思へる樣に今年の春よりは勉め勵みなんとぞ今年の感と異なるやうなしされど此一年の間に爲しつる事を思ひやれば何のなし得しこともなし又來年もかくやらん、願くは歳暮の感を忘るゝ事なくしてあらんを扨今年中なし終りし事とては只の一つもなけれど心に感ぜしことはいと多しそは人の賴むべからざる事なりそも國を出るとき二人の人を賴とせり一人はわが親族にて妾の身を監督し吳るゝ人一人は敎師にて將來の方向を定めくるゝことの約ありし人なり扨此二人を杖柱とし上京しつるに先敎師は今年の春ついで妾の親族なる人も無常の風に誘はれぬ此時人世の賴むべからざることを感ずること深かりし故に妾は此の時より全く世の中にはたゞ我てふもの獨りにて行はざるを得ざるやと心のさびしさ限りなかりしが其後あるしたしき國人

のすゝめにて當校に入學し只賴むべきは神なるをきゝぬかくて其後震災の事等きくに付けいよ〳〵人の賴みなく神に賴むの外はあらずと感ずると切なりそもこの唯一の感は今年中多くの感ある中尤よく有益なるものなれば來年よりは今年の如く失望する事なく悲しむとなきに至らんかとうれしき事斜ならず又來年に於てなさん事は今年なせるとは精神及行爲共變るらんと願ふなり。

（其七）

過ぎにし年の暮々には何時も其年に得たる所なきを思ひ明けぬ年の望少なく憂え胸にみちて年を送りしが今年の暮はいとも樂しき喜ばしき心地ぞする盖し去年までは己れには天より給はりたる尊ふとき玉を藏め居れり心に鞭ちて勵み磨き其光りを益す事を勉めなば天父に對しては其天職を盡くしたりと云ふべく日夜吾等の進歩發達するを樂しみとなし玉ふ父母又は師の君たちに對してはいかに其心を慰め奉るべきとといへる覺悟安心無之ためにかゝる憂ひ悲しみの感は起りしならん實に悲しむ者は禍ひなりかく暗きにさまよひつゝありし此身も天父の御導きにより活ける信仰の師の君たちの側に朝夕はんべりしより今や聊かながら覺悟安心を具へ居る一人となるを得たるかの如し之を思へば今年ほど益多かりし年はあらじ感喜の情はなか〳〵に拙き筆には盡す能はず唯々此上とも師の君がいよ〳〵厚き深かき愛をたれさせ玉ひ永遠不滅の靈の上に淸く高き御光りを照したまはるべしと信じ其御敎へに從いて日々勵み進みなばいかに樂しき事ならんと希望の光いと高く玆に喜びて此年を送り樂しみて來る年を迎ふるとなん。

歐洲列國女子高等敎育の近況

ヘレン、レンゲ近比一書を著し歐洲女子の高等敎育形勢論述議論頗好、女子高等敎育可否久敷定らず米國女子此點に付殆ど全勝利、餘波引て他境の姉妹ヾ運命消長に關することを明白也、合衆國專門大學三百五十校の內二百十七校及び獨立認可大學三十二校の內大凡二十校は旣に門戶を開て女子を迎ふ。女子大學其數合て九、其目的は男子同業の高等敎育を施して軒輊なからしむるにあり其外標準を異にせる種々の女學校其數三百、千八百八十七年合衆國敎會報告によれば諸大學生徒總數の內女子二割九步、其內五割二步は學課優等、其他正則の學校にて女子出席者總計七割二步也、其影響國家の爲大慶すべき點多くして合衆全國敎員中女子其六割三步を占む番頁の敎師諸方より申込ありて需用供給相平均、女子敎育は則是國民敎育也とは夫米國の謂なるか。

世間學術大家の淵藪と呼稱する獨逸に於ては女子に其長處を分つことを惜めりヘレン、レンゲ書中其理由尋問、依て說を爲して曰く獨逸は極て保守的精神隆盛也、故に女子高等敎育は先其決果を萬一に掛念し更に之に依て謬誤の論斷を下す今日の女子は中古の審想を假借して之と同一の論定をなす可き者乎否乎といへり。

千八百六十六年より八十二年の間佛蘭西に於ては女子普通學卒業者一百九人、千八百八十年女子高等學校及其豫備校續々起り千八百九十年には其數五十一校に登りぬ。

近頃英國に於て大學入校出願女子大凡數百人、千八百六十九年後女子を高等教育に迎へける其の先驅を「ケンブリッジ」大學となす之を聞くに大學教授の中、女子の歎願切々到底默止し難きを容れて女子六人を一級に編み別に男子と同等の學科を教授する者也とあり其後「ギルトン」大學起て「ケンブリッジ」に倣ひけるが「ニューハム」大學も亦女子學制編成、千八百八十一年「ギルトン」「ニューハム」二校女學生初て「ケンブリッジ」大學の最高試驗を受けたり是前代未聞人口に嘖々膾炙、千八百七十八年倫敦大學校全級を擧げて女子を歡迎す多般慶事聞者祝せずして可ならんや。

然れども斯般のこと英と佛とのみに非ず千八百六十七年「スイザーランド」の「ズリヒ」「ゼネバ」其他の大學は女子を高等學制に迎へ千八百七十六年以太利大學は亦其佳例に倣ひき「デンマーク」の「コーペンハーゲン」大學は女子に學位を授與し「スイーデン」に於ては美術醫學の高等學制男女の上下なしといへる露西亞の大學校も亦其學制を改めて女子の爲に特別の教授を爲す見よ「ピーダースブルグ」「モスモー」「キーブ」「カサン」の如きは則是也。

女子の高等教育を受けんとするもの稀なるは「スペイン」「ホルトガル」なれど「ハンガリヤン」女子にして「クラウセンブルグ」の大學に入らんとするものさへあり夫歐洲女子教育の大勢决水氾濫も遠く及ばしな、勿おろそかに思ひそといふ。

廿五年中の女學雜誌掲載の文のうち尤も主なるものの題を公示す、附録に見ゆ。

兒籃

小公子

第十六回（甲）

若松しづ子

それでベンは早速子供を引連れて、カリフオルニヤ州なる牧塲へ歸り升たが、此度の事件の爲に却て好運が向いて來升た。出立前にハ氏が當人に面會して、ドリンコート城主が既でのことにフオントルロイ殿とあるので有つたベンの實子の爲に何かして遣り度と特別の思召が有るに付ては、御自身が牧畜の株を購はれて、ベンに其監督をさせ、當人の報酬も充分有り、且つ子供の未來の用意にもなる樣にするが上策と決定された趣を傳へ升た。それ故、ベンがカリフオルニヤ州へ立歸り升た時には、到底自分の所有の樣あり、又追つては現に己がものになる可き牧塲の主任者とあつて行つたのでした。此牧塲は數年間に正しくベンの物になり升た、そしてトムは成長して立派な壯年になり升た。此兒は非常に父を慕ひ升て、父子とも〳〵誠に睦しい月日を送り升たから、過去の困難は一切トム一人の爲にとり返しがついたとベンが言〳〵し升し

た。

さて此度の事件のなり行を見ようとして、態々出て參つたホ氏もヂックも、之と異て暫らく歸國を見合せて居り升た。侯爵がヂックの世話をなされて、相應な教育を受けるまで資金を遣はされたといふとは最處から諦められたとでした。そして、ホ氏の方は店を實直な手代に任かせて來たに付ては、フオントルロイの八才の誕生を記念する時に催される宴會を見てから歸らふと決定して居升た。當日は領内の小民を悉く招き集め、樹園の中で會食、歌舞遊戯等を催し夜に入つては、花火、仕掛花火など打擧げるといふとでした。此話しの時にフオントルロイがかふいひ升た。

丁度、七月四日の祝日の樣にするんですよ。僕の誕生日が七月四日だとネイ、好かつたけれど、さうすれば、兩方一處に守れたつけもの。

最初はホ氏と侯爵との間の交際は極て懇ろいふ程で有ませんかつたが、これは英國の華族一同にとつて、或は不利で有つたかも分りません。實際、侯爵は萬屋の主人といふ樣な人と知己が尠なく、ホ氏も侯爵に懇意が多く有ませんかつた。それ故、稀に面會される時も、談話の途切れるとが多いのでした。其外、フオントルロイが務めて見せて呉れた立派な物事に、流石のホ氏も余程氣を拔かれて居升た。

第一、入口の門と石の獅子、並木道などが大にホ氏を歡する程になり升たが、現に城郭、花苑、花卉室、物見臺、孔雀、城内の牢獄、武具、大階、廐、制服の僕婢どもを面り見升た時は余程氣後れがし升た。併し最も感佩に堪へなかつた一事は先祖代々の畫像の連らねて有つた廣間でした。ホ氏がこの美事な廣間へ這入るとフオントルロイに。

これは博物館といふ樣なものかナ?

と問ひ升た。フオントルロイは尠しく胡亂さうに、

イヽーヘ、博物館じやないでせう。僕のお祖父さまはみんな僕の祖先の畫像だつて仰るんです。

スルト、ホ氏が、

なんだ、祖先とは何のとつた?

といつて、非常に不審がり升たが、フオントルロイは漸くの事で自分の先見ある丈譯を説き聞かせ升た。それで、メロン夫人を呼び寄せて誰が其の畫像をいつ〳〵書いたといふと、

又た畫に書いた其の人物が、何れも爵位のある人たちで、其方に付てはどふいふ珍らしい履歴が附いてゐたといふことを一々話させました。ホ氏は漸くの事で、祖先の意儀を解し、其人々に關して世にも面白い話しを聞く中に、何事も結搆盡しと思われて來、特に畫像陳列處が氣に入つた樣でした。そして市の宿やから毎日の樣にお城へ出掛て來ては、半時間も、もつとも此廣間を逍遙して、畫姿の殿や奥方を眺め、眺められて、頻りに頭を振つて居升た。

これらァみんな侯爵とかなんとかいふ樣なもんださうだ。われもいつかかふいふのになつて、みんな自分の物にすたるんださうだ。

内々は侯爵や、其生活向の事に付て曾て思ふた程厭でなくなり、城郭のこと、祖先其他の事を段々委しく聞くに隨つて、兼ての共和主義も嚴然元の通りで有つたか、どふかといふ點に於ては少しく疑しひことです。兎も角或日非常に、思ひ掛けぬ感じを口に出して申したことが有升た。

おれなんども侯爵になつたつて、たんとわるくなかつた。

いひ升たが、これは實に此人にしては非常な寬大な申分でした。

フォントルロイ殿の誕辰を祝ふ當日は亦豪義なことでした。そして若君は殊に大嬉びでした。樹園に群がる人々はけふを晴れと着飾り、城の屋根や張幔から飜めくフラホの賑々しく、美事でしたこと。けふこゝに來る都合の出來る限り一人も來會せぬ人は有ませんかつた。なぜといふに小フォントルロイ殿が依然元のフォントルロイ殿で追つて、萬事を總轄なさるといふことを悦ばぬ者は有ませんかつた。誰もかれもフォントルロイ殿と非常に人望の出來たお袋さまにお眼通りがし度く思ひ升た、それ已ならず、若君が左ほど侯爵を信じ、懐いて居られるといふことと、母君とも近來親まれ、丁寧に扱かはれるといふので、侯爵さまに對しての感情も自然和ぎ、多少好く思ふ樣にさへなつて來ました。それ已ならず、侯爵はお袋さまをもお氣に入つて來た樣にかおいられ、若君とお袋さまとのお蔭計りで、侯爵さまも追々善に化せられるに付ては一同の繁盛と仕合せになるかも知れぬといふ評判が專らでした。

文學

女性文學史（續き）

大和田建樹

上古

上古の上古に遡りて見るに。當時の口傳に出でたりしと云ふ古事記。日本紀。古語拾遺。風土記のたぐひに乘れる歌あまたありて。女性の作に係れるもの少なからず。固より神代は邈たり盡く信ず可きには非ざれども。二千五六百年來わが同胞の人口に膾炙し。國史に上り古事に引かれて。殆んど開闢史と古史中の主なる部分を占むるものなれば。先づ其二三を茲に示さんとす。作者には異説もあり事實や時代に或は相違の無きとも限られねど。其言語其思想は純然たる上古作者の代表なるべしと信ずればなり。

古今集の序に歌の起りを論じて「世に傳はる事は久方の天にしては下照姫に始まり」とありて其處の古注に「下照姫とは天若御子の妻なり。兄の神の形。岡谷に映りてかがやくをよめる」と云へり。此歌は古事記にも日本紀にも出でゝ。歌のはじまりと云ひ殊に女性の作なれば。趣意は味ふべき事すくなきにもせよ。諳記して置かんも面白かるべし。その歌は。

天なるや　おとたなばたの
うながせる　玉の
みすまるの　あなだまはや
みたに　ふたわたらす
あぢすき　たかひこね

（解）あめなるやは天に在るの意。やは音調を添ふる詞。○おとたなばたは弟棚機の意にて。弟は親愛して人を呼ぶ古言。棚機は機織る女の名より起りて美人の事に用ふ。○うながせる玉のは項に懸くる玉を云ふ。以上の詞は玉の文字を呼び出さんとする形容に用ひたり。○みすまるのは多くの玉を統べくゝり集めたるを云ふ。○あなだまはやは穴を明けて緒を通したる意とも云ひ。赤玉の意とも云へど詳ならず。玉の名と見ておくべし。はやは感嘆の詞○みたにふたわたらすは谷を二つも渡るほど光の強きを云ふ。みたにのみは美稱にて「みやま」「みよしの」などのみに同じ。○あぢすきたかひこねは味耜高彥根と書く。下照姫の兄神なり。

一首の意は天上の美人の項に懸けたる玉の如く。美しく谷二つを通して照りわたるは是ぞわが兄味耜高彦根よとなり。

天孫彦火々出見尊。海神の御女豊玉姫を娶りて皇子を產ませ給ひし後故ありて、豊玉姫は別れ住み給ひしに。皇子の愛らしく生ひ立ち給ふと聞て尊の御もとに贈り給ひける御歌。

あかだまの　ひかりはあれどしらたまの
きみがよそひし　たふとくありけり

(解)皇子を赤玉に譬へて。赤玉の光は日々に添ひゆくと聞けど。それのみならで。白玉もて飾りたる天皇の御裝姿は今にも尊く思ひ出でらるゝとなり。小兒は赤玉を懸け大人は白玉を懸けたる事など有りて斯く云へるにや在らん。

これより遙か降りて允恭天皇の御時に衣通姫と云ひし人あり君の御寵愛を受けたる事あつかりしが。或時ひそかに衣通姫のもとに御幸ありて。其さま如何と窺ひ給ひしに。かくとも知らで。つれ〴〵に堪へずや有りけん。左の歌を口ずさみ居けり。此歌世に名高くなりて或は貞女の鏡とし。或は歌道の祖神とて尊重せらるゝに至りしなり。百人一首の頭書などを披かば。多くは此古事古歌どを發見せん。

わがせこが　くべきよひなり　さゝがねの
くものおこなひ　こよひしるしも

(解)わがせこは夫を指す。〇さゝがねのは笹が根の如くと云ふ意にて。蜘蛛の手が竹の根の四方に這ひ廣がりたるに似たる形容。〇くものおこないとは蜘蛛の所爲に依りて今夜御幸あるべき前兆を占ふ當時の風俗。〇こよひしるしもの今夜は其占いちじるしくあらはれたりの意。もは感詞。

今古集序の古註には「わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも」として引きたり。それより謡曲の文句を始め。何に引くにも古今集の方で用ふれど。實は日本紀に載せたる右の歌が正しきあり。

(未完)

理學

いかにして躰温は減ずるや

のぶ子

皎々たる明月を眺れば一入物凄く思ひ、ちとの北風に觸るゝも肌膚を劈ざくが如く感ずるは三冬の候です。さて此時節に至りますと、鳥の羽翼は厚くなりて、外寒を防ぐに適します、……彼の寒雀を御覧なさい、まる〱として福々しく暖かそうに寒き朝でも威勢よく飛び跳て居りますこと。……其外獸類は軟毛増加し樹木は外皮重厚となりて同じく寒威に當り吾人の皮膚も一變して寒氣の侵入を妨ぎます。斯の如く優渥なる天恩に浴するにも似ず、我等今日も寒しさむしとつぶやきたり。いかに冬帝の權威に屈服するに切なることぞ、由て今吾人が身躰を寒からしむる原因を左に數え擧げませう。

冬日熱湯を戸外に出して置きますと、氷に變じます。又之に反して夏時氷を日光に暴露して置きますと、微温湯と化します、なぜ斯の如き變化を生ずるか考えて見ますに、總て物躰中に貯蓄せらるゝ温熱は、内外平均しようと云ふ性あるものにて、冬は外氣の温度攝氏の零度以上に降り居るを以て、其内に熱湯を置くときは、湯は斷えず其熱を發出し終に外温と同度に至りて止む、其れ故に、結氷します。又夏は外温昇て攝氏三十餘度に達することもありますを以て、之に圍まるゝ氷は常に外温を吸收して溶解し潜熱を得て微温湯となり、外部の熱と平均するまで増熱します。そこで冬は此湯と等しく吾人の身躰よりも熱を發出し霜や氷の温度と平均しようと致します、それ故に今日の如く寒さに堪えられぬのです。

又吾人の皮膚よりは始終水氣が蒸發して立ち昇りますし、肺臟よりも同じく呼氣と混じて多量の水氣が躰外に逃れ去ります、實にこれが爲めに失ふ躰温は夥しき量にて某學士の説に據れば此躰外に逃れ去る水氣の量は毎日平均三磅餘にして毎日蒸發の爲めに奪ひ去らるゝ躰温の量は顯熱潜熱合して總計攝氏六百度を降らざるとのことで、殊に冬は周圍の空氣乾燥して蒸發を促すの傾きあり、之を思へば吾人の身躰が幾多の寒氣を凌ぎ能く今日に至りしことを怪むの念を生じます。されど吾人の身躰は靈妙完備至らざる所なき精功無雙の暖爐に比すべきものなるを以て、定時之に適質の燃材を給し、活機を失ふことなき以上は火氣を保つ暖爐の暖かなると等しくいつ

も温かです。さて此靈妙なる暖爐中に投げ入るゝ燃材は何かと云ふに、其れは木炭でも石炭でもありませむ、皆さんの御承知の通り日々我等の用ふる三度の食物です。そうして冬は夏に比すれば多量の熱を失ひ、之を補ふに適するだけ過量の食品を要します。それ故に一月はお歌賃の一ツや二ツは過しても餘り害にはなるまいかと思ひます。されど箇樣なことを書きますと皆樣のお腹の中で胃が怒ります、人々は羽根よかるたと樂み行く時節にそう使はれて堪るものかと、申しませう。故に御決行と否とはよく胃と御相談を願ひます。

上に陳る二件の外、體温を降すのは冷き飲食物です。一ぱいの氷水を飲でも胃の温度は攝氏十七度許り降ります。そうして一度降れば元温に復するには三十分時餘を要します。それ故に齒切れがよいとか云ふて雪を召し上ることなぞはお見合せに致したきものなり。

寄書

吾は固執の名を甘んず

十二月十八日淺草鷗遊館に於て　山路愛山生

(一)。保元の昔し源の爲朝は曰へり、

人々は何にも成り給へ、爲朝は今日の藏人と呼ばれて何かせん。只本の鎭西八郎にて候はん。

と。吾人基督の信者が今日に於ける亦這般の慨あるを要す。吾人唯實行を勉むべし。罪惡を亡ぼして基督の王國を建つるとを勉むべし。日本の舊信條、舊風俗をして基督敎の衣を被せしむるとを勉むべし。一言以て之を括れば

事實の上に基督の國を立つべし

區々たる名稱の如き亦何ぞ言ふに足らんや。

(二)。此故に吾人は如何なる名稱にても甘受すべし　たとへ何なる惡名を付せらるゝとも辨ぜずして止べし。吾人は歷史に於て知れり何人も惡名を以て善人を毀ゆると能はざりし如く何なる宗派も敵黨の被らせし惡名の爲めに後世より誤解せられしとなし。黄金は何なる形を取るも黄金なり　英雄は何なる姓名にても英雄なり。吾人は敵より味方より色々の名稱、字、を吾人に與へらるゝも吾人は寧ろ感謝して之を受けんの

み。其名が實に違へりとて之を辨ずるの隙を有せざるなり。

(三)。然れども彼の自由派と稱せらるゝ友愛なる兄弟より吾人に賜りし固執てふ名稱に就ては更に特別なる感謝を以て之を拜受せざるを得ず。之が爲めに一言の謝辭を呈せざるを得ず。吾人は固より所謂チル、ソドツキシイ譯して固執派と曰へるとの果して正當なるや否を知らず。然れども固執なる名稱はよし正當なる譯字に非るにもせよ、日本の今日に於て吾人の地位に極めて適當なる名稱なりと信ずるを以て、吾人は友愛なる自由派の兄弟に對し其善き字を我教會の爲めに撰ばせ玉ひしとを感謝せざるを得ず。昔しは八犬傳の里見義實は兒童の土饅頭を甘戴せり、況んや卿等の好意吾人奚ぞ感謝の涙を揮はざるを得んや。

何を以て吾人は固執の名を甘受せんとする乎。

(甲)固執は生命ある基督教會の特質なればなり

スポルヂヨン先生嘗て紐育の市民に説教して曰く諸君の神は活けるや否やと。吾人は此言の實に生命なき基督教會を警醒するに足るを信ずるなり。吾人の神をして唯聖書の神ならしめよ。信條の神ならしめよ、神學の神ならしめよ、若しくは理論上の、批評上の神ならしめよ。吾人は固より此神を以て日本國を救ふの大事を擧ぐる能はざるを信ず、何となれば斯の如き神は生命ある教會を作り得べき活たる神に非ればなり。人は其知る處の如く行ふものに非ず、人は其知る處を固執する能はず只其心深く感ずる處あり、確乎たる經驗牢として拔くべからざる者あり　神我の神となり、我神の民となる、神我の中に住ひ我神の中に住ふの信仰あり、實驗あり而る后に始めて其信條に其教會に固執するを得べきなり。故に曰く固執は生命ある基督教會の特質なり。

(乙)固執は人性に滿足を與ふる宗教の特質なればなり

昔しの人戯れて曰く

歌よみは下手こそ善けれ天地がうごき出してたまる者かは

と是れ紀貫之が古今集の序に對して謔せしなり。吾人も亦言はんとす。佛教は下手こそ善けれ、天地が成佛してはたまる者かはと。佛教の哲理は高尚なり。其厭世の哲學は頗る人の或る性情を滿足せしむるに足る者あり、而も之が爲めに人をして悉く釋迦の如く「エクシタシイ」の境隅に入らしむる能はざりし者は何ぞや。他なし其人性の一部に滿足を與へて全部

に滿足を與へざればなり。是を以て正直なる西行法師は鴫立澤にあはれを知り。眞摯なる親鸞上人は雪の降る夜をさむしといへり。彼等は全く其寂滅爲樂の大敎理に固執するを得ざりしなり。

所謂胡馬北風にいなゝき越鳥南枝に巢ふ者、其性情の自然を滿足する者あればなり。

試に諸君に問はん、英詩を翻譯せしものと我國固有の歌と孰れか多く諸君の感を引く者ぞ、夫の江洲司馬伯樂天は何を以て潯陽縣の山歌村笛に心を慰めずして却つて楓葉荻花瑟々として江心秋月白き時船中の琵琶を聞て涙靑衫を濕しか、是其性情に投ずる者ありたればなり、宗敎の事亦之に同じ　苟も我性情に滿足を與ふる者に非んば何を以て之に固執するを得んや、故に曰く固執は人性に滿足を與ふる宗敎の特質なり。

(丙)固執は敎會の利益なればなり　若しも基督敎會をして世の會社の如く、邦國の如く、人數と富の多きを以て其卓純の性質を加ふる者ならしめば、其敎理を固執して其門戶を狹くすることは太だ不利益なることならん、然れども記せよ基督敎會は人數と富みにてば何事をも爲し得べき者に非るなり。

ペテロは嘗て曰へり金銀は我にはなしと然れども彼は二の說敎を以て三千人と五千人とを改悔せしめたり。請ふ見よコンスタンタイン帝以來基督敎會が富を有し權勢を有し、人數を有したるの時、其精神元氣、果して迫害の時代、虐殺の時代に對して遜色なかりしか、史家は基督敎會は世界的に異端に勝てり然れども之と同時に精神的に異端に負たりと論じたる者豈徒らならんや

苟も精神的の王國を立んとせば其の三軍の旗色は明かならざるべからず　彼の橫看すれば嶺となり側視すれば峰となるとか聞し廬山の如く、若くは屢ゝ其冠色を辨ずる土耳古雞の如く、看方によりては或は有神論にも見へ、或は萬物神敎とも見へ、或は基督敎なるが如く、或は基督敎ならざるが如く、或は厭世敎なるが如く、或は厭世敎ならざる如くにして而して精神界道德界に爲す所あらんとす吾人は其功を爲さゞることを證言し得べし矣。

若しも基督敎會をして只西洋好の男女を集むる處ならしめば洗禮と晩餐とをにぎやかにする處あらしめば。立派なる煉瓦造の大會堂を以て田舍者を驚かす處あらしめば。固執すべき

敎理なきも可なり。信條なきも可なり「ヂスシプリン」なきも可なりと雖も、苟も我日本の精神界道德界に屹立して其腐敗を止め其革命を促さんとせば自ら固執する處なかるべからざるなり。故に曰く固執は敎會の利益なり。

(丁)固執は社會の利益なればなり　仲尼は曰へり鄕原は德の賊なり。又曰く紫の朱を奪ふを惡むと其眞僞を混淆するを惡む也。

天下尤も恐るべきものは惡貨の濫出して經濟社會の信用を殺すとに非るなり　是猶恐むべし、僞善者の横行して品性の信用を失はしむるに至りては是殆んど忍ぶべからざるなり。

今日の文學界は歷史、傳記の將さに歡迎せられんとする時代なり請ふ吾人をして昔し話をなさしめよ德川の十代將軍(後明院殿家治)は田沼主殿頭父子を任用し奢侈を極め政治を亂り加ふるに天明三年十月七日信州淺間山火け東海東山二道灰を被り尋で二三年を隔て諸國飢饉野に餓莩あり、而して將軍遽に歿し嗣君幼弱なり。政府も人民も共に窮す、天下殆んど為す所を知らざりし也。賢相松平越中の守が老中となりて前後三世紀間幕府史上比類少き功績を擧げたりしは實に此時に在りとす。

是より先き越州の賢名は早く江湖の知る處なりし、越州亦慨然天下に志あり其老中となる前年元旦の詩に曰く

少小欲為天下器、誤將文學被人知、春秋回頭二十七、正是臥龍始起時。

其風采想望すべきなり。是を以て越州の相となるを聞くや天下實に始めて安堵の思ありしなり　頼襄之を記して曰く

云々　天下之心、如以敗船坐海、洪波逆風、不知所底、已而聞越公者出、躬宗親之懿、任付託之寄、宜其賞罰、變凶為吉、每一會發、人之望之、如出暖夜而覩日月也、其聽之也、如將潰之卒、得良將而聞其呵喝也、

と天下、何物もなかるべし只斯の如きの信用ある人品あらば亦以て心を强ふすべき也。

此故に品性の信用は國家の命脈なり、而して僞善者は此信用をして地に墜ちしむる者なり。

今日に於て眞君子は必しも基督信徒に限きると斷言するは勿論正當なる判斷に非るなし　然れども朝夕に說を變ずる識見多き世の中に於て。黄金の爲めに棒を振ふ壯士多き世の中に

於て。娼妓を買ふ者猶交際社會に歡迎せらるゝ世の中に於て。身に柔和忍辱を示したまへる黒衣の法師原が猶浮世の利慾に汲々としたまふ世の中に於て、せめては基督信徒だけは其の信條と規律とを確守して以て品性の信用を維持せんとは實に正直ある愛國者の心より希望する處なるべし　世の輕薄短視の徒は或は更に廣く敎會の門戸を開よと更に雜種の人を容るゝを喜ぶべし　然れども深く天下を憂ふる者は必らず基督敎徒か其特色を維持するとを希望すべし　故に曰く固執は社會の利益なり。

(戌)自由なるが故に固執なり　吾人の固執ある名稱を甘受する所以略々之を説きぬ。論者或は曰ん固執の必要なる所以は既に命を聞く。而も固執なれば則ち自由なるを得ず、余は余が自由を拂ひて固執を買ふ能はざるなりと嗚呼論者誤れり。吾人は全く反對の考を有せり　曰く

　自由なるが故に固執なり

諺に曰ずや合せたる者は離るゝ者なりと　所謂固執固結なる者は豈器械的の制壓を以て生じ得べき者あらんや、」若しも學校敎師の器械的の命令を以て生徒の心に忠孝の念を生じ得べしと信ぜば。若しも双親の命令を以て始より相知るとなかりし新夫婦をして膠漆の如くならしむるを得べしと信ぜば。　固執は自由を犧牲にする者なりと曰へ、若しも自由に非んば眞の一致、眞の愛心眞の尊敬なきとを語らば。自由なるが故に固執なりと知るべき也。

吾人は自由の意志を以て、自由の詮索を以て、自由の性情を以て我敎會に加はれり。强て合せたる者に非るが故に之を固執するとを得るなり。

是故に、吾人は＝若し複數を用ふるとを許さゝれば＝吾は固執の名を心より感謝して拜受する者也。

一點星

透谷隱者

眠りては覺め覺めては眠る秋の床、
結びては消え消えては結ぶ夢の跡。
　油や盡きし燈火の見る見る暗に成り行くに、
なかなかに細りは行かぬ胸の思ぞあやしけれ。
罪なしと知れどもにくき枕をば、
かたへに抛げて膝を立つれど、
千々に亂るゝ麻糸の思ひを消さむ由はなし。
今見し夢を繰り回へし、
うらなふ行手の浪高く、
迷ひそめにし戀の港は何所なるらむ。

立出て牕をひらけば外の方は、
ゆき〻いそがし暴風雨を誘ふ雪の足、
あめつちの境もわかで黒みわたるぞ物凄き。
しばし呆れて眺むれば、
頭の上にうすらぐ雪の絶間より、
あらはる〻心あり氣の星一つ。
たちまちに晴る〻嵐ひに憂さも散りぬ。
人は眠り世は靜かなる小夜中に、
音づる〻君はわが戀ふ人の姿にぞありける。

時事

○同もに新年を迎ふ

新水にて口嗽ぎ、肅然として明治二十五年元旦を迎ふ。慮みれば、世事日に切り、危機いよ〳〵近づく、邦家の爲に身を獻ぐるは則はち今日に在るとを知る。誰か方今吾等が天職の極めて重大なるとを悟了せしものぞ。其人は即はち吾黨の友なり。大事前に横はり、前程尚遠うし、今は同胞相鬩ぎて細事に局促すべき時節にはあらざる也。希はくは四方の友、心精を一洗して、今后ともに邦家の事に提携せん。

○新陳代謝此の年の如けん

寝しは去年、起きしは今年。只一夜の夢を以て兩年の間ひに渡る可らざる谷を穿つ、其實僅かに數時間の變移に過ぎざる也。

而も、人情の更新は理外に渡り、頃忽にして宛から別乾坤を生ずるが如し。夫れ人情の更新かくの如しとせば、平家倒れて源氏の起るが如く、たとひ左して莫大の進化を爲すにあらずとするも、舊内閣が倒れて新内閣起らば、希はくは、や〻民情を一新し、沈衰せる其生氣を快復するに足るべきか。左れど、今は此の移動も望まれがたきとなれり。

○年暮年頭何ものをか慕ふ

年の暮には錢の事を思ひ出すべしとは、時事翁の説法なり、年の初には餅の事を思ひ出すべしとは、衞生家の講談なり、舊年去り新年來るゝ際する吾人が覺悟は單に此類のみか。

○今后三月

もし米國大統領の改撰なくば、徒らに其撰擧競爭に費やすべき數百万弗は益用せらるべしと云へる人あり。思ふに、今后三ケ月間日本の各地にて徒費する撰擧入費は抑も幾千ならんか。願はくは、農夫田を作るとを止めず、商賈店を離れざるに於て、極めて質朴なる(故に極めて眞面目なる)改撰法の行はれんとを。

○遊べ

夜の當に眠るべきが如く、時に亦た遊ぶべき時あり、一月初週の如きは、則はち尤とも樂しむべき佳節なり、洋々として遊ぶべき也、たゞ震災地窮乏の人を念思するを何如ゝせん。

女報

可愛子編

●震災地寫眞を獻上せんとす　皇太后陛下には特別の思召を以て、赤十字社京都支部へ震災地派出救護費の中へ、金圓を下賜あらせられたるを以て、同支部に於ては右派出地救護の實況を寫影せし三葉を桐二重箱に入れ獻納することに决し其調進方を寫眞師成井輌佐氏へ命じたる由。

●松方伯の夫人　は保養のため昨年十二月二十三日午前十一時四十分新橋發車にて大磯地方へ旅行したりと。

●女子高等師範學校教授　なる川名萬松氏は昨年十二月二十五日、文部省より六級俸下賜せらるゝ旨達せられたり。

●明治女學校の卒業式　は昨年十二月二十七日午後五時半より開きぬ、來會者堂に滿ち、頗る盛會なりき、教頭巖本氏の校況報告あり、唱歌あり、風琴合奏、和洋琴合奏、和琴尺八合奏あり、日本文章の朗讀、英詩、英文の朗讀あり、校長木村熊二氏の勸告、並に高等科生惣代として竹内むめ子の祝辭、卒業生惣代として山田みき子の答辭あり、星野愼之助氏が武道教授の辨は、眞摯人を動かせり、中山みつ子、藤嶋ゆき子、樋口ゆり子の三女生が柔道演武は、精神場を壓し、伎倆衆を驚かしぬ、外國人の如きは氣を奪はれて見居たり、やがて時計八時半を報じ、人々の歸らんとする時、普通科卒業、速記科兼修の藤林ます子、小金澤たつの子が巖本教頭の演說を速記せし、蒟蒻板の摺物を土產として配布したり。

●明治女學校のクリスマス　は昨年十二月二十八日夕にして甚だ樂しかりき。

●麻布東洋英和女學校　は昨年十二月二十三日閉校式。

●山梨英和女學校　は同二十五日閉校式。

●靜岡女學校　は同二十三日閉校式。

●大阪一致女學校文學會　は昨年十一月二十七日同校内に催されたり。

●大阪一致女學校主幹　是まで京都に傳道し居られし阪口菊三郎氏は、昨年十二月上旬、一致女學校の主幹として赴任せられたり。

●山陽英和女學校の義捐　昨年十一月五日震害慘狀の詳報同校に達するや、直に被害者を救恤せん爲め、五六兩日の課業を休み有志者に就き金品の義捐を乞ひ、二晝三夜洗濯裁縫に從事し、單衣十九枚、綿入七枚、半纒十九枚、帶十四條、其他雜品二十點を調製して寄送し、又震災孤兒救恤の爲め一週間食物を節し、剩金四圓十五錢七厘を得て岡山孤兒院へ喜捨せりとぞ。

●大阪婦人友愛會　にては昨年末、岡山孤兒院に金四圓を、大阪窮兒院に金一圓を寄贈したり。

●大阪慈惠女學院　は眞宗大谷派の建る所なるが、昨年震災地の孤兒百三十餘人を集めて養ふとこせりと。

●德島女子裁縫學校　渡邊ケン子の設立に係る德島町の同校は、追々生徒の增加するを以て、今度教務擴張の爲め從來の組織を改め職員の俸給等を定めたりと云ふ。

●私立裁縫場　廣島縣三次郡河内村長森川晁輔氏は、同村の有志者山下專八、森川柳平兩氏の贊助を得て他の有志と協力し、本年十一月一日より私立裁縫場を設置し、三次町より女教師を聘して教授を初めたるに、日に增し盛大に至り目下近在より通學するもの巳に五十餘名もあり、而して尙ほ追々隆昌に赴く可き見込あるを以て、山下專八氏及び同村の森安廣助氏は經費の節省を圖る爲め、自分所有の家屋を無料にて教場に貸與せりと云ふ。

●女紅場を起す　靜岡縣豐田郡豐西村石原の小栗るい女史は東京共立女子職業學校を卒業し、今般歸鄕の上假女紅場を自宅に設け、專ら女子に手工を教授する由其の開場は本月よりなりと。

●女子高等師範學校への入學生　兵庫縣知事は、同高等師範學校長の囑托に依り、同校が各府縣下に於て募集中なる入學生徒中へ、左の三女子を推擧したり。

神戸英和女學校卒業生	岡山縣士族	稻石やす
東京明治女學校卒業生	和歌山縣士族	神中みさを
京都府高等女學校卒業生	姬路市士族	角田しづゑ

●函館女學校手工品展覽會　は昨年十二月十八日より開けり、槪して昨春の奬勵會に比して餘程生徒の技倆進步したるが如しと、

女學生の料理實習　伊豫松山高等小學校に於ては、昨年十二月廿三日正午より、全校女學四學年生をして和洋料理の實習を爲さしめ、其料理物は全校職員より相當會費を以て支辨すると云ふ。

●讃岐婦人進德會常集會　昨年十二月二十日其最終の常集會を高松市天神前大護寺内に開き同會總理谷森みや子、會長神原きよ子、副會長山田よし子を始め、其他會員の人々相會し、山崎ゑい子の北海道在任中の雜譚、伏見りう子の演戯等あり、終て栗林公園内に忘年會を開き、午後四時頃退散せりと云ふ。

●三年二ヶ月にして能く文字を解す、奇女子こそあれ、岡山縣勝北郡勝田村合村某の長女ミチ(五年七月)は、本年六月同村に設置しある尋常小學校へ入學し、日々怠りなく通學する程に大に上達したりしが、二女テイ(三年二月)は姉が學校にて習ひし事柄を家に歸りて復習するを、母の懷にありて聞き、時々傍らにて之れを見居たりしが、或る日姉が學校より歸り例の如く讀本を復習し居たるに、普通讀本下の巻「親の父を祖父と云ひ親の母を祖母と言ふ」に至り忘却したれば、母に問はんとせしが、テイは母の懷に乳を飲みながらミチの行きつまりし處をスラ〳〵と讀み下したり、如何にも不思議の事なれば、何人に敎へて貰ひしやとて、尙ほ他の箇所を示せしに、何の苦もなく讀み了りしにぞ、益々不思議の事とし之れに文字を書かしめしに、假名なれば一字も書けぬと云ふとなく漢字も少々づゝは書くとの事。

●京都通信　◎京都看病婦學校生徒　谷村かつ子、永井某兩人、此度大垣よりの請に應じ同地へ赴けり。（昨年十二月二十二日發）。

●福井通信　◎產婆　福井縣にては本年十數個所の產婆講習所を各郡須要の地に設置し、教師を派して產婆術を講習せしめたりしが、各講習所共に產婆試驗の成蹟宜しく、新產婆百餘名を得たりといふ。◎醜業　當縣下の娼妓貸座敷免許地は、福井、三國、金津、丸岡、蘆原、武生、大野、勝山、鯖江、敦賀、小濱の十一ヶ所也。◎一般の女風　は柔弱なり、衣裳の縞摸樣、髮の結び樣、帶のメ方杯勉めて東京に習はんとするものゝ如し、而して清烈の氣慨に乏しく、中等以下の社會にては其女子の所謂「園ひもの」となるを却て喜ぶ程なり、歎すべき事にこそ。◎女子の職業　されど福井市を始め、各郡町村にて、近來絹織物の製造日一日より盛大に赴き、該織工に從事せる女子頗る多く、士族の妻女を始め少しく閑あるものは皆該織物に從事せり、其賃銀は一ヶ月上等五圓より下等壹圓内外なり、而して十歲内外の女子にても三四ヶ月間傳習せば、其技に達する故、女子の爲め誠に喜ぶべきなり。（昨年十二月十九日發）。

●佛國大學教授　法學家エミール、アコラス氏逝けり、其死は十八歲の一女子に對し艶聞ありしより終に自殺せしものなりとの說あり。享年六十六。

●レデーサモルセツト婦人　龍動なる婦人新誌は同婦人の人品を評載して曰く婦人が秀拔なる美術心は全く其が兩親の遺傳なり特に博識にして且技術製に巧妙なる父の遺傳による而して婦人若し一意之に務めたらんには有名なる美術者たらんと必せりと。刺繡術に妙なるに至りては中世紀以來見も知られざる程との巧麗なるものを意匠縟々するなど一度婦人が住家を訪ひし者も家内の裝飾より庭園に至る迄自から主人が嗜好の現はるゝを見ん。加ふるに身体健全にして美なる心靈と共に强き能力を有せらるゝを以て敢て善業の爲に身躰を犧牲に寘る等の恐少なく多く特愛の道に働かるゝと云ふ。婦人又數年前「我等が田舍の生活」てふ書を著はせりと。

●以太利大學女子の入學を許す　以太利大學の多くは婦女の入學を許可せりと云ふの祝すべき報を傳へ聞ぬ、同政府の一大臣ビーボセリー氏の告示によればハムベルト國王陛下には一千八百九十年十月廿六日の日付を以て法命第二章第五條に於て、國内何れの大學を問はず總ての人民は之が學生たるを得、學生及聽講者に關する箇條は總ての女子の上に同じく行はるゝとの箇條を發せられたり。改新の際適當なる順備なきの故か只少數の婦女のみ學生たるを認可されき然れども性の何れを問はず勉學に自由の緖を開きたるは誠に賀すべき事にこそ。

●森シヅ子孃　日本神戶より渡來せられたる同孃はノルスウエスト大學に修學の望にて當今はエバンストンにて善良なる婦人の集合なるカレーヂカツテーヂに滯在せらる、孃は神戶婦人禁酒會員なり而して同事業にはよほど熱心にして後來は此事業の爲め且は本國の爲に大に盡すあらんと種々研究せらる、孃は近々ユニチソホールの福音集會上にて談話されん事を頻りに望まれ且近々日本に渡航せんとするレデーヘンリーサモルセツト婦人にも屢々面會せらるゝと云ふ（ユニチンシグナル）

廢娼記事

●福島縣　過般廢娼建議の可決せし故にや、福島町隨一の貸座敷と呼ばれし橘屋及武藏屋の二戶は昨年末廢業し、其抱へ娼妓は、相當の口ある者は他へ鞍替させ、借金の少き者は其儘暇を與へたるにぞ、其中には直に曖昧屋へ這入り込みたる者もありとか。◎廢娼建議と聞て却て娼妓を買入る　世には又惡利を射るに拔目なき者もあればある者なり、北會津郡東山溫泉場の貸座敷營業者等は、昨年福島縣會に廢娼建議出で、旣に其大勢定まれりと聞くや、夫こそ金儲けの蔓を得たりと大に喜び、直に馳て新潟に赴むき娼妓買出しに着手したりと、今其次第を聞けば、娼妓の相場必らず騰貴すべし、何故となれば廢止年限定まる時は、其年限内は賦稅をも廢さるゝ必定なり、左すれば新規營業は素より相成るまじければ其以前に於て鑑札を請け置き、無稅にて營業を爲すべし、然る時は稅金丈の利を見るとするも一人に付一ヶ年三十六圓にて、十人なれば三百六十圓となり、之を五ヶ年に積算すれば一千八百圓となる、是れ丸儲けなりとの考なりしと。◎廢娼建議遂に否決さる　福島縣會議員鐸木三郞兵衞氏外二名の提出に係る廢娼の建議は、昨年同縣會第一次會に於て三十余名の贊成を得て可決せしが、昨年十二月二十日、二次會三次會を合せて討議の末、二十六名に對する二十五名の少數にて、遂に否決されしとぞ、嗚呼今日は義人の一層奮ふべき時なる哉。

●宮城縣　娼妓營業繼續願常盤町貸座敷の娼妓營業は何れも昨年十二月廿八日限りと定められたる處今後三年間營業繼續の事を同月二十四日仙臺警察署へ出願せしに是迄營業不都合無之分丈け直に右願を採用されしと云ふ。

●岐阜縣　娼妓鑑札を出願する者多し震災の爲困難し居る婦女をして娼妓に勸誘する者ある由にて、それ等の爲にや昨年末娼妓を出願する者續々あり、岐阜警察署長富田貫氏は充分の取調をなし、果して其勸誘等に出ざる者に限り許可することとせりとか、さても悲むべし。

●通信の正誤　拜啓愈御社運御隆盛之段奉賀候陳者何人の報道に係るやは存せず候へ共貴誌第二百九十四號に於て山陰の通信部中島取の景況を報じて云ふ所大に事實と相違有之候間御手數ながら左の全文を揭げ被下候て特書御訂正を乞ふ貴誌第二百九十四號に因州島取の女報ありて二個の婦人會は各々女學校を有すとあれども弊校は如何なる婦人會とも關係なし尤も島取高等女學校は島取婦人會の所設たり且つ弊校を以て外國婦人と關係ある樣云ひあれども是れ亦世間の想像にて決して斯る關係あるものにあらず純全たる本邦人の設くる所なり併に本年一月頃の貴紙に於て二個の婦人會は各女學校を有して互に相軋轢する樣報じありしが此時にも訂正を乞はんかと思ひ〳〵遂に忘れて今日此報に接し再び其事を思ひ出せり此の軋轢云々とは當方には思も掛けぬ事にて（島取婦人會には如何なる感情あるやは知らざれども）是れ亦想像の誣言と云ふべし事實右の如く相違致し居り候此段御訂正ありたし

明治廿四年十二月廿一日

鳥取英和女學校

小公子の評

●若松しづ子の「小公子」を讀む

紫山人

曩に女學雜誌に連載して同好の喝采を博したる、しづ子女史の「小公子前篇」美麗華煥の衣服を粧ひ、一部の冊子となッて此の頃坊間に躍り出でぬ、巖本善治君紹介して一本を我社の中井錦城に贈り批評を囑す、錦城頃日政論に多事なり亦翦紅裁綠の事に拘るの暇なきを以て轉じて僕に代評を托さる、夫れ代脈なるものは大いに先生の手術に異り、されば病者の感情を害することも亦從ッて少しとせず、而して僕今代脈を勤む、病者の地位に立つ女史の失望察ては巖本君か紹介の勞徒らの如くになりて、甚だ氣の毒に堪へざれども、唯り最も喜ふべきは女史が襁褓劬勞したる「小公子」は最も愛すべき健兒にして、虫氣一ッだになき無病息災のぼッちやまなれば、假令先生が診察しても代脈が頭を捻ッても、無病は無病なり健康は健康といふより外亦一匕の投すべき藥なきを奈何せん、巖本君安心せよ、女史氣を落すなかれ。

然れども人は疾病の器なり、胃病肺病も疾病なれば面瘡疣も亦疾病なり、されば是れ箇の可憐可愛の小公子、素より青盲二豎に惱せらるゝ患なしと雖も四万八千毛髮の間、亦一豆の疣半影の面瘡なしとせず、さりながら是れは代脈不鍛錬なる僕が診たる所、或は之を先生に見せなば、天晴見事なる五躰の粧飾と見立つるかも知れず、女史よ巖本君よ、幸ひに之を意に介せず、いよ／＼珍重保育して、早く後篇の時代にまで、此の可憐なる「小公子」を成人せしめよ。

疣とは何ぞ、面瘡とは何ぞ、「乞ふ僕をして診察書を作らしめよ。

號を逐ふて連揭し、號に逐はれて譯述したるものなれば、之を責めるは無理か知らねど、行文の間、前後其趣きを異にするが如きあるは一の瑕疵なり、例へば「おッかさんに聞いて知ッて居ました」とか「おとッさんがお亡くなりなさッてから」とか「その通りにして上ると」とか、小公子自ら己れの經歷を敍するが如き文法を用ゆるかと思へば忽まち筆を轉じて然うでもない樣に思はるゝ文勢となる、概して云へば此の一篇は文章の上よりすれば、自他混淆支離滅裂と云はれても蓋し辨疏の辭なきに苦むなるべし、然れども是れ君が家の文法、さうした所に價値が有るのかも知れず？。

此の自他混淆も多く最初の十數葉中にある如くなれど、追々進み行くに從ッて繁自然に少なくなり、眞摯適切讀者をして身其境に臨ましむるが如き心を抱かしむる所少なからず、して見れば女史は矢張能文健筆のお方なり？。

女史よ巖本君よ、僕が然くれ文章の上に於て長短評するの無禮を咎むるを休めよ、その故何ぞや、此の小說の世界は元外人が腦中より描き出したるものなれば、今力めて其趣向を評し、專ら其理想を論ずるも是非褒貶責は原作者にあり、女史に於ては：：ヤ、風馬牛の感なしともせざるべし、僕が彼に寬くして此に嚴なるは蓋し此の故なり。

僕は最も女史が原作の意を躰して緩急勉めて之に離れざらん樣に心掛けたる用意の深きを重んず、然れども女史は亦如何にもして我邦人の一噱を博せんとする野心の痕を留めたり、例へば（十八頁）世間の人達が小公子セドリツクが高尚にして可愛氣なるを賞する言葉に「丸で華族の若樣の樣だ」と書きしは何故ぞ、成程此の言葉は我國なる英國人などには適切の讚辭かは知られど、貴賤無差別の米國に於て安んぞ王侯將相に種あるを知らんや。

セドリツクが老侯爵の前にてヒツギンスに與ふる一書を認むるに當り「（差置くべし）の上に（何卒）といふ意が添へてありました、さうして終に（フオントルロイ敬白）と記してありました」後の對話長ければ畧す）眞に是れ殺人的の滑稽、多涙多恨の好滑稽、我國の近松竹田等常に之を以て人を泣かしめ人を感ぜしむるの秘訣となしたり、之を要するに此の可憐無邪氣の小公子は無病息災の若樣なり、僕が診て以て疣あり面瘡ありとなしたるものは、代脈と見て引込ました羊羹の復讎とならば可なり、女史何の恨むる所あらん、巖本君また何の怒る所あらんや、嗚呼近時出色絶倫の飜譯小説、小公子万歳！しづ子女史及び巖本君大万歳!!!

（十一月十五日讀賣新聞）

●小公子　若松しづ子女史譯　女學雜誌社發兌

此書は可憐なる小公子フォントルロイが頑固なる祖父の侯爵の心を和げ、之を善に導くことを叙述し、小童の社會に對する感化力を顯はしたる道德小說なり、我邦近來少年文學の書多しと雖、或は高尙に過ぎ、或は鄙俗に失し、中庸を得たるもの少し、此小公子の如き其弊を免かれたり、余輩は我邦少年文學の爲めに此の如き好書を得たるを喜ぶ。

（經濟雜誌第五百九十八號）

●答書　矢崎鎭四郎

矢崎氏（嵯峨の舍おむろ）の來書左の如し。

謹啓林間に酒をあたゝめ紅葉を燒の好時節と相成候折柄愈御清適奉欣賀候昨日御令閨御譯述の小公子一冊御惠投難有領收仕候今夕燈下に拜見仕候一讀卷を措くに暇なく卷尾まで讀終申候一讀の就にては唯セドリツク及其母に同感を持ちつゝ何の考もなく殆んど其人と共に身自ら實況に對するの思ひ致さ是勿論作者が人情の微を穿つ技倆あるに據ると一は御令閨の筆管も文飾に力を得ず最も直率に最も平易に淡々筆を染められしに據るものと敬伏仕候他日機會を得て御令閨樣に得拜顔度ものに候坐低侍宜敷御鶴聲併せて御を感謝たてまつり候

十一月十五日　草々不一

●答書　嚴谷季雄

嚴谷氏（漣山人）の答書左の如し

拜啓秋冷の砌彌々御淸康大賀此事に奉存候さて今日は御令閨御新作惠贈の榮を得難有奉存候躰裁の優美なる近來多く見ざる處此まづ敬服致し候本文はいづれゆる〳〵拜見可仕候先は取あへず御禮まで。早々不備

十五日　嚴　漣　拜

●偶書　思軒居士

「小公子」を讀む

昨日女學雜誌の巖本君「小公子」一冊を寄せらる曰く吾が內子の譯する所と。淡泊に直言すれば余は方今海內にありて女流の著述にして能く我眼を惹くべきものの出でむとは思はず故に此書に於ても亦た甚だ重きを置かず唯だ知人の贈りたるものなるがゆえに偶ま煙を喫するの暇徒然其の第一ぺーずを開き視しのみ而るに讀むこと數行にして遣辭遇頗太はだ常に非るものあるを覺えたり因て更に二三ぺーヂを讀みゆくに愈よ益す凡ならざるものあるが如し是に於て心頻る驚き起ちて書簡を探り原本を取り來りて且讀み且照らし終に第一回を竟はりたり是日の務畢るを待ち携て寓室に歸り直ちに燈を掲げて之を讀む既に業を卒りて尙ほ飽かず又た原本に就て此書の未た譯し及はざる第七回以往を讀み小公子の第八誕辰を看了りて睡に入れるときは夜既に三時を報せり。

「小公子」は英國今代の名家バル子ツト夫人の傑作「リツトル、ロード、フォントルロイ」を譯せるもの全篇十五回あり是は先づ前半第六回に至るまでを以て一冊となせるなり後年の功を成すも益し遠きにあらざらむ歟。

原作の何物たるは其書の既に十數板を重ねたると屢ば之を英米諸國の劇場に演するとを以ても其一斑を想ふへし余は特に斯の可憐なる女學士の譯文を言はむ。

請ふ余が詞の不敬なるを咎むる莫れ余は第一に譯者が英文を讀むの容易なる猶ほ父母の手紙を讀むがごときに感ず世間屑男子にして尙且つ往々譯り讀む成語イデオム悉く熟路をたどるが如し之を邦語に飜へすに及て極めて明白極めて透徹些しの晦澁些しの沮滯あることなきなり。

尤も服する所は談話ダイアログなり貞正なる淑女英爽なる童子鄙俚なる村婢萬やの主人靴みがきの少年恣睢我慢なる老侯爵給仕御者牧師佃戶聲容歷々として活現せむとす流石に下等賤民の詞は女學士が常に親接せざる所なれば其甚だ勉めたるに拘はらず概して尙ほ二三分の感を遺す者あるに似たり然れども此外は殊にヒローの小公子の詞の若きは工夫力貿賀に十二分といふべし余が之を讀むとき讀みて妙絕の處に至る毎に誦して家人に聞かしむるに家人は皆な針を停め眶をうるほして之を領認せり而して之を原文に參トへ考ふるに敢て一字を增さず敢て一字を損せず只た忠誠に謹勅に原文を換せるなり。其記述叙事の處も亦溫順妥當にして毫も生硬殊更にせるが如き迹を見ず諄々として而もくだくだしからず原文を嚴守して而るも拘づらひ泥まず平易復た簡淨殆ど遺憾なきに近し。

世間の謂ゆる言文一致體に由る者にして余が心より服せるもの唯た「浮雲」ありしのみ今日此書を獲て二となれり熟ら世間の謂ゆる言文一致を事とするものを觀るに縱ひ巧みならざるまでも一般尋常の文は之をかくと能くするにあらざる者なるしたゞ唯は奇を好むより或は自ら樹立する所あるより強ひて勉めて之を爲するなり故に必ず其高にあり〳〵斧鑿の痕ありて自然の美を欠かざるもの希れなり獨譯者に至ては斯の一躰より以外には復た文あるを知らざるが如く滿身の文才滿身の物如く技能は強ひず勉めず自然此躰に聚注せるものに似たり試に渠の文を看よ信のみ質のみ一點のヤマなし一點のケレンなし謂ゆる場當りキザ氣に至ては毫も之を見ることなきなり是れ故らに言文一致を事とする者の決して企て能はざる所なり蓋し優しく柔長なる女性の天賦に由りて自ら然る歟。

之を總ふるに女學士は一個の譯者として最も先づ具へざる可らざる同情シムパシーを饒有せり故に其かく所深切到底而かも筆墨の表常に飄然たるものあるなり是れ其本たる固より作者バル子ツト夫人が篇中の有らゆる人物に向て悉く一團の和氣を以て相接するに出づると雖も亦た譯者が其の作者の同情に同化して筆墨を用ゆるの致す所と謂はざる可らず。

余は從來我が藝林にユーモア殊にパセツクチユーモアの啼笑齊至的の妙趣を寫すに適したる筆墨乏しきを恨みたり譯文に至て特に然りき而るに今ま此の譯文を觀るに譯者は或は能く之れを爲すべし余は此書の後半出づるとき刮目して第十一回「亞米利加にての掛念」を讀まむ。

譯者が第二回の後半を割きて之を第三回に合せるは何の爲めにする所ありてなるやを怪しむ小公子がより〳〵詞を訛まるを記するに說明をセイメイといはしむるは少しく穩やかならざるに似たり別に恰好の語なきや。

余が此書を讀みて得たる第一の訓誡は曰く「爾、爾が男子なるの故を以て女流の著述を輕視すること勿れ」、十一月十三日。（報知新聞）

● 小公子

譯者かし子此書の卷頭に序して云へらく

幼子の戯れ聲のせぬホームの空氣は殊に冷たく宛がら下宿屋の心地がし升其家の夫婦は相互に又世の同胞に對して多少寛優ならぬ處があるのは往々見る事です是より推して假に幼子の住まぬ世を想像いたし升れば利慾に奔走する人心が此上どの樣に罪深くなることでしやうかと恐ろしい樣に思ひ升云々

是れ女たる優美の心を具へて母たる慈愛の情に富むものにあらずんば云ふ能はざる所なり此書小公子は譯者かし子胸中の燃立つ如き優美慈愛の心情迸り出でたる一端ならんと譯者は幼子を推して濁世の蓮花家庭の天使と云へりしが余は此小册子を拔て卑猥なる小說界の蓮花天使ともたゝへなん唯憾むらくは此書手柄の過なきかを疑ふ何となれば譯者は此書を以て廣く幼子に趣味を與へんとするに此書飜譯巧妙に過ぎて讀むもの日本の文字を味ふよりも寧ろ西洋の文意を玩ぶの感あればなり譯者は家庭の幼子達を喜ばしめんとするに此書は寧ろ下宿屋の二階に家庭を作り出し荒くれ書生を泣かしむるの分子多ければなり是を換言せば此書は讀み聽かさるゝ幼子より寧ろ讀み聽かす母親に感動を與ふる分子多ければなり噫是れ强て其の失を求むるのみ好んで理屈をつくる。み此書のあらん處に蓮花麗はしく開き此書の讀まるゝ家庭に天使樂しく舞はん（十一月十七日、中央新聞）

● 小公子

坪内雄藏君

原書の精神は無邪氣なる小公子を主人公に利己にのみ傾ける老貴族を副主公にして「無邪氣」の周圍に及ぼせる感化並に周圍の「無邪氣」に及ぼせる影響を寫さんとし力めたるものゝ如し小說としての價値如何は譯書に就きて論ずべきにあらず只一言すべきは斯く純潔無垢の良小說を紹介したるは女學雜誌社平素の主義よりいふも誠に能く撰みたりといふべし譯文はまことに流暢平易なれど其中に譯者が深切なる苦心の跡見えたり就中長幼貴賤の言語を別たんとて又は文情の調和をはからんとて「キット」「大したもの」「鼻が高い」「目がない」等の俗語を用ひたるが如きは殊に全力を濺ぎたりと見えていとめでたし行文の中に餘り多く「御」の字を用いたるが少しく耳だちて咎むべき程にはあらず「人にいひ〳〵しました」しつかり歩いてゐました」などいふ言葉を厭れたるはおのづから優しき女教師が幼童に敎ふる時の風に似たり何れも譯者の婦人たるを證してなか〳〵にゆかし兎にも角にも當今外國美文學輸入の必要あるに際し斯く原文の精神と外形とを寫し出さんと力めし翻譯の見はれしは文學のため賀すべき事なり。（早稻田文學第四號）

● 小公子

無、無、無、

未だ原文を味はゝざるも譯者の明瞭且つ簡潔なる文字を讀むで充分にその妙味を窺ふに足らむ。再三の板を改ゆ是を場に上したりと云へば原書巳に江湖の贊稱を博したるを知るべし。

余の知れる所にて小兒の情を寫せしものヂツケンスに「オリバー、トウヰスト」又「オールド、キユウリオシチー、ショツプ」等諸篇、トルストイに「幼兒、少童及び青年「ドストイエフキー」に「禍患と侮慢」あり。父母の愛に育養せられし然垢なる情若くは凌辱殘酷なる中に在つて常に梟眼を張り人を視るの狠惡なる心を描きて其精を極めり。バーヂツトの是書未だ其斑たるを得ずと雖ども、清白無垢の童情が能く殘忍なる虎心を化するに足るを明かにして餘蘊なく又前者に比して格段なる遜色あるを見ざるなり。

是を我が今日の作家に於て徵するに嵯峨の屋主人の「初戀」、「野末の菊」漣山人の「初紅葉」「妹背貝」等頗る妙構を以て聞ゆ終に氏は兒童の心理に精なるを以て儕輩の間に推さる。殊に「初戀」の淳なるは蓋し現代稀に見るの文字にして殆んどトルストイの神域に到達せり。然るにバーヂツトの此書を以て比ぶるに頑剛抗逆なるドリンコート侯爵を見るに溫和老實なるホツブス伯父さんに於けると毫も異ならざる小公子の單純なる腦裡を顯示する緻密の文字未だ遽かに軒輊するを得ず他の漣が諸作は中々に及ぶべくあらざるなり。

明箱の上に腰掛けてホツブス伯父さんと大統領選擧を語るエロル、セドリツク、二三千回も航海を試み度々身を切られ燒て喰はれ十五回また二十回も頭の皮を剝がれしヂエレがケンケイ咄を聞きそのまゝに母に語る愛らしきセデー、執拗剛戾にして容易に口を解かざる老侯爵の前に餘念なく熱心にベース、ボールを說明するフオントルロイ、老侯爵と教師モードント氏の前に手紙を書き綴字法に苦んで一心に丹精を凝し「何卒」「敬白」等の文字を挿み得意なる小公子、凡そ是等の情母の愛に熔まりて世路の辛酸に泥まざる純清淨潔なる幼兒の有する所として貪婪飽くなく血を啜り肉を啖ふの羅刹も其前に在れば胸裡の邪念を追逐するを得む。而してバーヂツトの是書は能く此情を細寫せり。

余は原本を讀まざれば一半を味つて輕々しく全豹に及ぶを得ず、唯前半に依つて窺得たる所斯くの如し、余は末松氏が譯出せし「ドラ、ゾーン」よりは寧ろ是書を推薦するに躊躇せざるなり「ドラ、ゾーン」が情思纏綿たるを寫せしは妙なりと雖ども未だ如かず、「小公子」の思想純一なるに。

譯者、若松賤子の序に曰く

「邪道に陷らうとする父の足をとゞめ卑風に流れゆく母の心に高潔の德を思ひ起させるのは神聖なるミツションを擔ひたる可愛の幼子に限るので其任を果すものは他に何も有りません」云々

思ふにバーヂツトが意の存する所もまた奚にあらむ譯者能く此意を体して以て此書を譯す、徒らに典文を衒ひ功を貪らんとて筆を磨する尋常飜譯家に比して先づ一層の卓見を供ふるを覺ふ。

賤子女史の筆簡潔にして意の馳するまゝに任せ絕えて修飾する事なくして少しの澁滯を見ず。恰も如斯純一なる思想をして充溢する是「小公子」を譯すに協へり。蓋し譯者が西文に熟通する事の深きに依ると雖ども抑もまた天資の筆を運ふして區々たる修飾を賴まざる故にあらざるか。余は最も是等の文字を喜ぶものなり。題して「小供のよみ本」と云へど、かのフェアリー、テールの極めて穉びたるに似もやらず、老境に臨むの人も其妙味を試めて舌頭快味を覺るに足らむ。

賤子女史曩に飜譯「忘れがたみ」あり、此篇と想の較や類する所あるが如し。此二篇を讀んで女史が常にダイダクチツクを說き文學を以て教育の方便となすを知るを得べし。

能く先人と轡を並べて馳駈すべく、若松賤子が「小公子」は毫も原意の妙を殘傷せ

す作家に對して負く所なしと云ふを得ん。

●小公子　湖處子（國民之友第百卅八號）

小公子は滿場の喝采の裡に出で來る、其譯文の得失については既に飜譯王思軒居士の滿口採揚する所なれば、余亦何をか云はん余は唯原著の着想及び結構について一言せんのみ。

小公子は明かに理想的の小説なり、何となれば一個天使の性質を以て此小公子に擬人したるものなればなり、プレトーが所謂る上帝坐邊の靈魂が地に降りて人となれるもの、裡、最も完全無垢なる性質を顯はしたるものなればなり、キリストの幼時の生活は皆人の常に想ひて得ざる所、小公子或は其模形を得たるに近からん歟、既に理想小説と云ふ、小公子の性質の如何に人性より高遠なるも咎むるなきのみならず、人性より神性に昇進するほど如何に理想の高遠なるを示すに足るべし故に小公子が其智、其情、其意及び其能辨に於て如何に七歳にませたりとて固より是非すべき所なく、寧ろ其の能く天使たる所以のものを發揮して餘蘊なき著者の技倆に敬服せんのみ、唯惜むらくは此の小天使に對するに他の大慾覺を以てせざりしことを。

夫の酒風症の老侯爵は一見して大慾覺の如くなるも、其實は貴族的傲慢と武人的酷溺の兩質を有するに過ぎず、渠能く貧者を叱し牧師を責むると雖も、渠が全能の君主として藏くる所の國王の指呼の前には渠も亦一個可憐の小兒たるを得べし、余は著者が此兩質に加ふるに他の富者的吝嗇の性質を以てせざりしを惜む、何となれば不仁者の本領は前者にあらずして主として後者にあればなり、小天使が夫の頑翁を自由に操り得ると一見すれば異なる樣なれど再讀すれば怪しむべきものなし、其の深根の不仁者ならざるが故なり、故に已く此の小天使を以てせば他に必ず理想の大慾覺を要すと。

人物の配置に於ては保母のメレ餘りに淡泊に過る樣なり、渠は小公子の看護者なり、稱讃者なりこれらにまして第二の母なり、渠が小公子を割愛するの情殆どエロル、夫人に劣らざる樣預想せられたり、然れども離別の一段に於て渠は隱れて見えず、唯一個冷淡なるのメレあるを見るのみなり、蓋し理想小説の短處は其筆力の或る一部に偏して全部に遍滿せざるにあり、此書亦此病を免れざる乎。

然れども此は唯原著について云々せるのみ、譯者が此書の堆中より此の最好の著作を撰擇したるの勞と、腐敗したる家庭に向て此の清淨純潔の空氣を注入せんとする志に對して、余豈端ぞ感謝し稱讃せざるを得ん哉。（十一月廿六日國民新聞）

●小公子の評（若松しづ子譯述）　是者山人

凡そ小説に於て、兒童の思想を其儘に寫すは難し、兒童が情想の單純にして高尚無邪氣なるを巧に寫す最も六づかし、シルレルは兒童小説に就て、極めて精細に注意したり、兒童が單純なる情を寫すの弊は、唯に無味淡泊に走るのみならず、面白味を失すべし、何となれば彼等が經驗少き幼き思想には、錯雜せる多くの情念の留まらざればなり、夫れ小説は種々なる事情、樣々の境界を描き出して、其人が思想感情の變化錯雜の極めて著しきを寫すに於て始めて妙なるなり、然るに此の雜多の境を唯一の單純の念を以て巧に讀者をして其情を思念せしむるに至ては蓋し困難の業と云つべし、本篇はセドリックなる一小兒を以て主人公となしぬ、セドリックの怜悧にして、優美無邪氣なる情を巧に寫し出せり、譯者が骨折の處思ふに餘りあり、文章は平易、流麗なり、まゝ言文一致躰の處あるが、矢張り言文一致躰として視るべきか、去れども、そは處々に使はれし語句に依る、全躰には其いやらしき、いやに變手古なるヶ處少きは、先づ上出來と申すべし（併し「かういひました」とか「どうしました」とか云ふ處多きは、相手を求めて話すが如き心地せられて、折々は自傳躰の變調かとも思はれる處ありぬ。

又セドリックの談の中に大人じみた事ありて、如何に怜悧なるも斯くてはと思ふ處あり、且つ其餘りに多辯にして、小悧巧過ぎて、此の人物は未來唯だ一個の優さしき平凡なる人となりぬ可しと感じられぬ、思ふにセドリックは慈善の心に富みし無邪氣の好兒童だると共に、述者も其邊に力を用ひられしものゝ如し、兎も角も作者が其思想と其情脉を精細に穿たれしは、上出來なり、元來此の種の小説を斯くまで、平易に流麗に盡されしは、感服の至りなり、尙ほ本篇は其前篇なれは、后篇の出るに至て、精細なる批評を下さんとす、讀者よ此の小説の述者は女學雜誌の若松しづ子氏なり。（十一月十七日、中正日報）

●小公子　賞鑑之瞽薩

評者は原書を見ざれば、其の譯の當れるや否やは知られど、其の原文の精髓をかみしめられたる譯文なるは、保證すべき節あり。其の着想の面白さ、いはん方なしされど譯者も自から云はれ、世の人もてはやす如く、只管に幼き天使の罪なきさまを寫し得たるが、此作の妙處と言ひ得るやに思はる。小主人公は母の愛の下にのみ育てられし幼兒としては寧ろ如才なさ過る處ある樣には思はれまじや。小兒は人の容顏よりも其感情を讀むこと、往々成人の及ばぬこともあるものなれど、此小主人公は、まゝ容顏よりならで、己が思想の能力によりて、思返して話頭を轉ずるなど、あまり「ませ」過ぎてやあるべき。ホッブス氏も獨辯、ドリンコート侯も獨辯、此の平民貴族兩樣の感化か、小公子の人物に何如に影響するかは、人性の研究には必要のとなり、後篇を待て、細に譯者の惠によりて之を研究するを得ん。文字に於て、當時の普通文字には、此位の言文一致こそ恰好なるべく思はれ侍れ。卷首の自叙躰まがひに讀まるゝは、評家已に道ひ及ぶものあり、少しく疵瑕とされやなるべき。製本美麗挿畫も面白く、兎に角近來無二の好譯本なるべし。（亞細亞第廿二號）

●小公子　愛山生

題して小公子と曰ふ本と童子の爲めに著せしが如し而して說く處は即ち英米社交上の實相無邪なる小兒と罪惡紛糾せる世界との衝突、讀み來りて人をして境遇の人を化する太甚しき者あるを知らしむ好箇の風俗小說。文は言文一致躰にして原文の勢力、格法を失ふまじと勉められし迹歷々たり作者の苦心察すべし。（護教第廿二號）

●答書　下田歌子君

さて過日は御令閨樣御譯述の小公子壹卷御惠與に預り有難く早速拜讀仕り候右小說はかねて原文も有名なるものゝよしに受賜はり及び候ひしがまことに目下小兒教育の爲參考の一助とも可相成近頃珍らしき良小說と奉存候御譯文も殊に平易簡明なる談話躰を御用ひ相成候故却て能く其實情眞景を失なはれず最も面白くおぼへ申候何卒速かに後卷の御發兌渴望に堪へ申候未だ拜晤を得ず候へば御序に御令閨樣にも宜敷御禮申上度希ひ上候先は取敢ず御禮のみ。

新年附錄の序

一連續せる古往將來の時なるものに人類隨意に時限を畫し、稱して月とし年とす。而して一日の故をもて、去歳と云ひ、今年と云ひ、去歳は去つて三巴遠く、今年は依然として久しく存するものと思へり。果敢なき哉、人の迷ひや。汝もし遠永に存すとせば、歳時年月の區別は物の數ならず。汝もし七十古稀の短命の外ならずとせば、一歳の新たに來るは、冥路に入るの道一歩を進めたる者にあらずや。要するに、浮々として舊き年を送り、又浮々として新しき年を迎へ、屠蘇に醉ひ、虚禮に追從して而して此の大ひに沈思すべき好機會を失ふは、何等の遺憾ぞ。社員社友深く之を惜しみ、年頭特更に慘然たる文章數多を示し、以て一歳の好機、深く人生の運命に考及するの便りとなさまく欲す。吾社の新年附錄は、敢て讀者を樂しましめんとを旨とせざるもの也。

親よ後れし後の述懷

客員　すゞ子

(一)生を喜ぶは淺し死を悲しむは猶更に淺しと悟りがほなる導師はいふめり實にやきらやかなる王侯の榮えも麗敷美人の媚もいつ迄斯てあり經べき早晩野未の烟と立のぼりては百とせの後誰か思ひいでゝ歎くものあらん波風のあらき世に出でゝ親と慕ひ子と愛しむ五十年は稀にあるのみ斯ても猶期至れば泪とゞめ難きはなべての人の情なるを生れて爰に十餘り八年人なみ〳〵に生し立て西ひんがしも辨ゆるまで敎えはごくみ玉ひたる惠は海山も只ならじ雲水百里を離れつゝ報恩を後日に期せし怠りは今ぞ身を悔とはなりて責むる之。

(二)明治辛卯の年六月十八日は何といふ殘酷ある日ぞ朝より立迷ひし雨雲は夕べになりていよゝ暗らく天にふさがり惱むともなく眠るともなく床の上に横れる至慈至愛なる我父が嘗て塵世の汚れに染まず終りまで彼れが胸間に明らかに輝きし一片無紕なる魂を握り去りて是を見て歎けとや甲斐なきからのみをぞ殘ぬ七年一日の如く看護して上あき慰を與へける母が

手も今は取返すすべなかりけり何となく異りたる樣あるに驚きて胸の邊りさぐりし時の面かげは先の程より激しふなり勝りし我心臟の鼓動譬へなくなりにけり「心せよ臨終なり」と震へる彼の唇よりもれにし一言は古來幾多の親に後れ子に先立れし人の腸を割き來りて今や一層の利刄となりて打亂るゝ胸に立てり時や誠に近村の寺鐘無常を報じて嚴肅に父の最後を吊ふに似たり時なるかな命なるかな昨朝飛報に接して驚ひて東の都に學びの友どちと袂を分ち日ねもす夜すがら祈禱のみして飛び行く車のはこびさへ遲き樣思ひ渡りつ今朝なん漸う枕べに參りつき衰へ給へる面ざし見上げ奉り父上今し歸り侍りぬと聞え上參せし時胸に十字形を作れる双の手を徐に動し嚴かなる目のあたり愛の溢るゝ笑をもて靜かに顧り見給ひしものを今や聲の限り呼び奉るも答へなし閉ぢたる目は再び開かず結べる口動くかと見へし己れの心の惑ひなるを覺りぬ昨日迄も今迄も荒き風だに厭ひはてしを四邊の障子はくまなく明け渡されぬ疲たる御身になみ／＼の衣も重からんとて手に手を盡して輕き温かき衣母の撰びて着せ參らせ給ひしものを今は荒々しき小衾の上に情なくも下し參らせて悼ましとも悲しとも言べき言の葉を知らずかくと聞きてつどひ來る人々の詞も取り／＼に胸を撲ちて止めんとする忍び泣の涙納るべきすべもなし世にましゝ程は人の歎をわが物にして共に悲しみ限りなき慰めを數多の人に與へ給ひしものをなど斯くはなりはて給ひしぞ今十年が程永らへまして人の苦しみ救ひ給はずやなど隣り人の右左りよりかき口說き泪打垂るゝ見れば中々なる事言ひ出でゝうからの歎き增さしむる哉とかへりては恨めし打しめりたる家の内漸う騷々敷なり行は野邊送りの事取りまかなはんとて村人のより集へるなりけり上の愛ひは下の喜びとや諺に聞けど誠にこうようの折をやいふなる貧しき人々は饑たる腹こやさんとてこれより三日が程は手傳ふに事よせて思ひのまゝに煮たきて樂しげに食飲みするは此村の例なりけり誠に淺間敷しふもいみじふも知らぬ人はおもふめり。

(三)母子はらから夜もすがら亡がらの前に後ろに打守ながら言ひ出る言葉なし聞ゆるものは軒近く草葉にすだく虫の音と尼僧が唱ふる經の聲のみ互に包むたもとの泪溢れて席を濕ほすのみ燈くらき壁間の扁額これなん世にましゝ程いたく父の愛

で給ひし伊達老侯の筆なりけり病ひはよし癒へはてずとも御齡かくありてましと祈りしものを「松の雪」とは何の謂ひなりしぞ世離れてより此かた今は悲しみも苦しみもなし只、心懸るは彼が身の上なりさりながら行末また頼母しからずとせず命だにあらは今三年が程は世にありて落付く先を山とも海とも見屆けてしかなと明暮に母にの給はせしとや何事も神の御心とは思へども斯まではと惶く忘れては思ひ起さるゝなりされど死のけふにあるはかねてより自らに思ひ設け給ひし故か春の休みに故なく呼返し給ひ常にも增して彼處此處に伴ひ給ひいひ聞かせ給ひし事もいと繁かりし期果てゝ再び京に上るの日は名古屋迄見送り給ふなどなべてならざりしに何とて其時に今少し心して物事ふかく聞き置かざりけん。けふ晝過る頃聊か病のすきの折り萬事は師の君に願ひ聞え御心を勞し奉らんじ思に幾程もなく彼地より御ふみ玉ふとあるべければそを見て思をやすめ給へといふに心得給ふ樣にてぞ待がほにおわしつるを今は早せんすべもなし夢きるゝ二時許り前床の上易からねば立せて其椅子によらせよとの事に如何あらずやと思へども詞そむくも本意なしかつ心持のいと慥かに見え給へばとて起し奉るに庭のおもの青葉ふかく生茂り岩間の苔もよのつねならず可笑きに露のさら〳〵と風にこぼるゝ樣など快げに見渡し給ふものから何となく力なげなりし面かげの生憎に目につきてさりやらずやがて醫師の參しにありし病ひの再發せし日より此方の事をちもなく自らして語り聞かせ給ひし聲音物ごしに伺ひしが何とて今も猶聞くようなるらんけふまで物語り人のふみにも悲しき事は數多見聞きぬれど斯はかりのつらき日を其人々も見つるかも人の身のはかなさは今知とにはあらねども我身を推して人の上今よりは深く思ひ聞えよと神の下し給へるいましめのしもとなるらんと漸う心定りてまた思ひめぐらせばいと哀なるは妹の上なりけり三歳にして父上の大病のわざわひにあひしよりけふまで友どちの春の花秋の紅葉すこやかなる父上に伴はれつゝたのしく遊び給ふ見に付け幼な心にうらやましふも淋數うも思わたりけんを今よりは物の心も覺ゆるまゝに幾倍悲しう打歎くらんわけていと惜きは母の御身なれ中々に思ひやり聞え難き歎きし給ふらんと思もへば立ちよりてとにかくに定まれることゝ歎きとゞめ給ひてよといふに日頃雄々敷心ろより父上とこそ常々にの

給ひ置きつれ事はてしとて今暫し世におらばなどかひなきたは言は露斗りもおいひ出そとげに限りある事は人の力に及ばじとつようはいひ放ち給ふ目の中こそぬき止め給ひあえぬ玉の溢るゝなり夜は明行て朝日はきらやかに輝らせども一家の上におゝひかゝれる朝露は日一日はれやらでまた更に夕べの空とはなりにけりきのふのいまこそかくの給ひし折なれ此時こそ最後の御けしき見しなりけりと互にいひいでゝ晝過る頃參りつきし都よりのふみの御詞身にあまるもせめて今一目見給ひ得しならんにはいかに嬉しとや思ひ給ふらんなどくり返し歎かれて棺の中に納めまつるからの面かげ今は此世の見奉りをさめそとおもふかやる瀬なくて祈りのぞ昨日もけふもかぎりなき慰めとは思ひぬ。

三日目の夜さりこそ哀れも深きかぎりなれや人々あまたひつぎのあたり打かこみて物も得いはずおとゝひ五人は前のかたに居よりてたがひにおもふ心を物してあすを待ちつゝ棺のふたとも今一度びと推開ては實に五十有餘年心を勞し思ひを苦めかくて得たる數多の結果を惜しげもなく人にゆづりてわづかに纒へる一片の素服に滿足し方四尺の棺中を己れの天地と定めて安らかに座し給へり一歩もなくて叶はざりし手ならし給へる杖のみは羨敷も傍らに隨從せるを見れば心千々よ亂れて糸の如し謹みて左のごとくしるして御手に捧ぐこれや花につけ紅葉につけはた世の中の有樣につけ思ひいでいひつゞくる歌物語りも見せ奉りて病ひの苦しみ幾分かを忘れさせ奉らんと年頃思ひわたりつる最後の孝養にてぞありにける。

道をおみ浮世の塵を大神の玉の御座のかげにさけゝん

さつき暗草葉をこがす螢火はこれや歎きの燃るありけり



彼一夜

社員　山月子

明治二十一年五月十一日以來、病の床に臥し給ひし母上は、二十二年二月に至りて、病は益々重く躰は次第に衰へぬ、今は何時逝き給ふやも知れずと、父上の注意し給ふを聽くにつけ、辛く悲しく、人の見ぬ時、心の限りに泣きしは幾度か、我が心弱くてはと、人の在る時は涙を嚙み占めて、胸も張り裂く思をせしと每日の常なり、もしや夜の間に沒れ給ふともやと、我直ぐの弟と、每夜を各番に、枕邊にぞ徹しける。

さても母上の病は到底全快せざるか、父上は昨年、母が床に就き給ひし時、我等に向ひて「今度は六ケ敷やも知れず、見る所にては大丈夫らしきも、決して安心すると勿れ、平癒せざるものと思ひて十分に看護せよ」とのたまひき。これまで父上の「六ケ敷と」診斷し給ひし病者幾十名、一人として全快するものなかりしを見れば、母上も遂に癒へざるか、悲しきとの極みなれ、されど待て、世の中に「炊豆に花」といふ諺あり、炊豆に花の咲くべき理なきも、若し此理に無き實例の世にあらざりせば、如何で斯る諺の生ずべきや、さては癒へざると思ふ母上も、若し至誠と赤心とをもて看護し奉らば、よし絶ゆべき玉の緒なりとも、如何で繋ぎ留めぬとやはある、天地神明も我心を照鑒あれ、我一家に憐みを垂れ給へ。心に祈り身に働く。斯る折は愚痴とあるは人の常か、鍋の蓋を洗はんとて、泉水に出る時、いつも我は心に祈念して「此鍋蓋を泉水に投げて、丁度其中に入らば、是れ母の全快し給ふ驗なり、もし入らずば、是れ癒へ給はぬ驗とせん……希くは丁度に中に入れよかし」と、輕く手より擲ちて、入りし時には全快し給ふ證據ありと喜び、入らざりし時は、强て心に打ち消して「斯樣の事は當にならぬもの」とおしぬ。水汲まんとて外に出で、冴へ渡る月を見ては、心の中「ア、此月をして悲の色を帶るの日來らざらしめよ」と願ひぬ。

さても母上は初より病の全快覺束なしと知り給ひぬ、一日我顏を見づめ給ふて「御身と〇〇とは安心なれども其餘の子供心配になるなり」と曰ひければ、我は答へて「弟妹等の事は、我身引受け申すべければ、御安心あるべし」と涙を殺し、胸苦しさを忍びて答へ奉りたれば、「御身が其心にてあらば安

心なり」とのたまひき。五歳になりける幼弟が枕邊に來りし時、菓子を與へて坐せしめ給ひ「○○よ、母が死するも宜しきや」と顔打守りて問ひ給ひしが、幼弟は我を顧みたるのみ答へなかりしかば、再び同じ言もて問給ひぬ、幼弟は今や泣んとするばかりの顔にて「厭なり」と答へぬ。母上は觀て「大人しくせられよ、兄上の言を守れよ」と力なげに曰ひ給ひぬ。

交る／＼に徹夜すると、既に幾夜か、ある夜、雞の一たび鳴きし後、母上は口の乾くとて、雪をば求め給ひぬ。庭に出でゝ櫻に積りし雪をとりける時、月の光は寂しげに我姿を照したり。

今日は二月十八日、昨日の風雨は收まりて、天氣いと麗らかなり。母上の尊容、見奉れば、二三日來、一層に痩せ衰へ給ふて、涼しかりし目さへ、何となく朦朧として見へぬ。されど今日は朝より「常に增して心地よし」とぞのたまひける。これまで次第／＼に食細くなり玉ひ、我等兄弟が種々に心を盡して調へしものも、一向御胸に入らず、或時我と弟が顔を見給ふて「御身等が斯までに心を盡して持ち來るものを、食ずしては濟ぬあれども、ドウしても胸に下らず氣の毒の事よ」と詫るが如くに曰ひ給ひしを聽きて、胸も塞がるばかりなりしが、今日は我手に茶碗を持ちて勸め奉りし粥の湯をば、二三碗飲み給ひ、我等の喜ぶ顔を見て、自らも喜び給ひ「いつもより胸に痞へず、此割合に食進まば、全快するともあるべし」とのたまひぬ。是まで如何に「全快せらるべし、心強く思し給ふてよ」と慰め奉りても、更に信じ給はず、斷平として死を覺悟し給ひし母の口よりして、此言葉を聽きし時の、オ、如何に嬉しかりしとよ。弟妹と共にいそ／＼と父上に此由語りたり。いつもに悲しき色を帶びたる日光も、今日は障子に寫る影いと美はしかりき。

かくて其日は暮れぬ。次第に夜は深けぬ。御枕邊には父上と弟と我と畏く坐しぬ。次の一と間に妹と二人の弟は臥しぬ。眠るが如く覺むるが如き母上の御顔、打ち守りてたゞ肅然たり。唇の乾くを度々水もて濕しぬ。やがて父上は聲を上げて母を呼び給ひぬ。細く目を開き給ひしのみにて答なし。「○○等を起せよ」と、父上ののたまふ言葉に、力なく弟は立ちて、二人の弟と、一人の妹を起しぬ。とも／＼に來りて、淚に交る聲にて母上を呼び奉れば、其折々に稍々目を開き給ふのみ、

もはや視力も無くなりぬ。父上は、末の弟の五才なるをば、抱き給ふて、「よく母上の顔を觀よ」といひ給ひければ、睡れると思ひてや、頑是なくも、たゞ顔を覗くが如く見たるのみ。父上は興奮劑をもて、母の御鼻の邊に、時々差し付け給ひければ、消へんとする命の、しばしは繋がれぬ。「今は息き絶へたり」と。父上の宣ひし時、傍に並べる兄弟、一度に聲を立てゝ泣きぬ。「アヽ胸塞りぬ、我が背を打てよ」といひし時、弟は左に涙を押へ、右に我背を打ちぬ、時しも聞ゆる雞の聲、我等が泣く聲に交はる。此悲歎、此愁傷、遣るに所なきを奈何せん。

「如何に泣くも詮方無し、よく看病したれば、諦らめよ」と、父上が、やさしくのたまふを聽きては、猶更に涙催す。既にして思ふやう、悲しきは我のみならず、悲しみのつらきを思はゞ、我れ先づ涙を收めて、弟妹等を慰めざるべからずと、心を直して靜かに枕元など取片附くれば、鷄の鳴く聲、又も隣家に。

炭など活して、弟妹等に暖をとらしめしに、五才の幼弟は、此時はじめて母の死せしに心附きしや、ワッとばかり泣き出しぬ、菓子を與へ、錢など與ふるも、平生は喜びしものゝ、今夜は「皆欲しからず」と手にだにとらず、ます／＼聲を擧げて泣きぬ、オヽ尤もなるとよ、我等はさま／＼に慰めて、漸くに其泣くを止めぬ。

嗚呼、四十の齡を一期として母は逝り給ひぬ。十八の御時、父上に嫁し給ひてより、今日に至るまで、世の所謂歡樂てふものは一つも得給ふ所なかりき、其至誠と其熱涙とは、父上と、我等兄弟の爲とに盡されにき、我等に敎育の資を造らんとて、髮結に髮を結はしめず、其代を積み給ひぬ。其赤誠は、去年死したる七才の妹にさへ感徹し、彼は其廻らぬ舌にて「母上よ、今までいたく苦勞をかけ奉りたれば、兄は年長けて女敎師となり、母上に安心させ奉るべし」といふに至りぬ。其他の兄弟も、我も、早く業成り志遂げて、母の安心し給ふ御顔を拜せんとのみ――實にそれのみ、思ひしを、嗚呼最早此世の人にあらず………。

追懷す、彼一夜、何れの時か之を忘れん、我等が心に深く印して長く久しく滅せざるなり。

人生に寄す

アヂッソン原作

客員無名氏譯

原作題して「ミルザ夢幻の記」といへり蓋し至れる眼をもて、そゞろに世相を觀ずる時はかゝる幽意もおのづから浮ばなむ、いでおろかある筆を引て其とうとさを瀆さばや。

陰暦五日は我家の風に從ひてきよらかに暮すを常となしけり左れば朝まだきより沐浴して觀經を畢りいでや沈思默禱に日を過さなむと獨り「バグダット」の高丘に登りぬ習々たる清風に吹かれて丘上を逍遙せし程にいつしか我心は脆き人の命のあはれに沈みて彼やこれやと思ひめぐらしけるうち誰語ろふとにはあらざれど人は惟影にして命は夢の世なるかなとぞいひてし。

かく思ひ續けしが眼を上げて程遠からぬ巖上を眺めしに牧人の樣して手に樂器を携へたるがありけり我かの山叟を見出せしや山叟樂器を厥口唇にをしあてゝぞ吹き初めける之を聽くに聲喨々として風に送らるゝ音調の波瀾えもいはれず異樣也善者の孤魂天上の樂土に入るとき鳴り響く絃聲に過し昔の惡夢を洗ふとぞ聞きつるもかゝるいみじき音色なるべしやと思はれし我心魂は已に溶けなんばかりなりけり。

山叟我を巖上のいとも高き邊に導きて厥絶頂に我をおきつ東の方に向ひて子の見しところを語りねといひぬ我曰く我は彼颯々たる深谷と其谿底に湧れる巨濤をしぞ見る山叟曰く其境や則ち零落の谷にして彼どうくと音のするぞ「永遠」の巨濤の一部分なる我曰く我見る巨濤の此方の端の深き霧中に藏るゝかと思へば彼方の端の同じく霧中に沒るゝは如何にぞや山叟曰く子の見しものは「永遠」の中の「時」となん呼ぶ一部分なりそは天地の開け初めしより世の終極まで日輪によりてこそ計らるれ其兩端は共に烏婆玉の黯闇にて包まるゝ斯大海原に子は何をか疑ひ見たる我曰く我はかの巨濤のもなかに渡せる橋をしぞ見る山叟曰く子の見し其橋は人の命なり匆粗畧に見給ひそとありければ我は暇を費して彼方を打見やりしに橋には三の曲折と十の完き「アーチ」とあまた落頽れたる「アーチ」の見べき試に落頽れたる「アーチ」と完きものと

を合すれば大凡百の數ともなりなん我かの「アーチ」をば數へし折山叟我に告げて曰く此橋は其始つかた千の「アーチ」もありたるに恐ろしき海嘯をうけて今は殘りし程となりぬ、さはあれ子は彼橋の上に何をや見つる我曰く我はその上を渡り行く幾萬の人と端にかゝれる黒雲とをぞ見るといひしが更に心を籠めて眺むれば、ごう〳〵の過客多く橋より落ちて下に踊れる巨濤の中に沈みぬ、いや更に打見やれば橋の上には人目にわかぬ阱板數知れずありて過客其上に歩をかくれば直に落ち入りて影は瞬間に見えずなりぬ橋の入口にはかゝる阱板の厚くあれど始て霧中を出でゝ橋を渡らんとし先つ其中に陷るものさへ多し橋の中半にいたれば其板いよ〳〵薄くなりぬ、さばれ完き「アーチ」のもとには、いやしげくむらがりてありき。

吁、落頽れたる「アーチ」の上をたどり〳〵危き途をぞ歩み行きけるは其數誠に稀なるに此等の人も果は其長途に疲れ相つゞいて落入りにけり。

この魂をも消しぬ可きつくりものと其處此處に眼に觸るゝものとによりて我は少焉沈思の三昧に落ちぬ我心は喜びもこそしたれうかれもこそしたれ今思はずもかゝる悲しきめを見ひと〴〵が身を助けんとてありとあらゆるものを捕ふる樣を見ては深く憂鬱の情にぞ閉されける或は考ふるところあるが如く天の一方を仰ぎて默考專念をこらしける折足蹈はづして見えずなるもあり多くは其眼にきらめき其前に跳るうたかたを追ひて得とゞきしと思ふところは歩みあやまりて水底に沈み行くもあり、かくさま〴〵の混擾を極めける中に刄を手にして橋上を彼方是方と走るものを見たり其戯頭にて數多の人をつきければ落ちずともあるべきものを阱板に陷らしむること多かりし。

我は焉に於て長く嘆息して曰く嗟、人は空にぞ作られけるかな日を待たずして凋落寂滅に歸することそ夫れ如何にぞや生き永ふる世は憂思のみを重ねつ果は死中に溺れ入らなむかとぞいひけるに山叟我をあはれみて左る心地悪きながめを止めしめき山叟曰く世に出で來る人間の樣と其無限の別離とを再び見る勿れ眼を反して彼處の霧中に不老長生の門を見よと我は山叟の言ふが儘に彼方を見やれば（山叟仙風の力を示せしものか或は深ふして見へ難き暗霧の薄やかなる處にてもやある

らん）水天遠く雲の彼方に開けたる深谷を見たりけり其間海水大岩の爲に二に別れ、かたへは雲に包まれて何物をも見えわかねど、かたへの水中には島嶼浮きいで丶百の花又仙類に覆はれつ照り渡るまん〳〵の潮水は其間を流れたり人はかゝやける衣服を着け桂蘭の冠を戴き或は樹の間を逍遙し或は靈泉の邊に横はりもしくは、花の床に伏して鳴く鳥のね落つる瀧の音や人の聲又は管絃やその音色さま〴〵入亂れたるを聽けり、かゝるうれしき風色を見て我心喜悦を添へ來るに空飛ぶすべもあらば、いでや彼處に到らましものをと鷲の翔を羨みけるが山叟我に答へて曰く彼處に到らんとするに常に橋の彼方に開きて見えし死の門を過らではかなはじ子の前にしん〳〵たる翠色あたらしく見ゆる、かの島嶼に海面にまばらなるが如くあれど濱の眞砂の數よりぞ多かる子が此に見る島嶼の後には島又島ありて目もだに及ばじ想像だにも及ばじな、そも〳〵これらは善者死後の樂苑なり、その世にすぐれし善德のしなによりて是處彼處にぞ分れ住みける、これらの島嶼は一として住める人々は安樂の境ならずといふことなし、吁ミルザかゝる處に住ひて心滿たじといふことあらんや、かゝるためしもあるべきに人の命は悲しとこそ見えけるか、かく樂しき境に入らんとて死するに何のおそれかあらんや、かゝる無限のむくいにしあるに人は空にな作られしと思ひぞいふに我はそゞろ風興の情にうかれて、これらの樂しき島嶼を眺めあかず遂に山叟に語りけらく見よ〳〵「アダマント」の巖樵のかたへ遙か海水に横はる黒雲の下にはそも如何なる秘密やあると左れど山叟寂として聲なし、ふたゝび問はましと身を反せば山叟の影既に見えずなりぬ我即ち思を馳せ來りし夢幻の境をたどらんとするに逆卷く濤や「アーチ」の橋や蓬萊の島やそは皆消失せつ「バグダット」の長き谷間に牛羊駱駝の呱々として高く鳴けるを聞くのみなり。



女學雜誌社出版書目

鈴木弘恭大人述	つれ〲草講義	一冊	價金八錢
鈴木弘恭大人述	文法口授	一冊	同十六錢
鈴木弘恭大人述	百人一首講義	一冊（改正）	上三十五錢 並二十八錢
舩越鼎太郎君著	產婦小兒攝生法	一冊	金十六錢
關綸正路君纂	ひめ鑑	一冊	同四十五錢
中島俊子君著	善惡之岐	一冊	同卅五錢
横山雅男君著	婚姻論	一冊	同十六錢
島田三郎、植木枝盛兩君演說	廢娼演說	一冊	同五錢
巖本善治君述	妓樓全廢	一冊	同五錢
島田三郎、巖本善治同著	公娼可滅	一冊	同四錢
農學士寺尾勝三君著	植物學	一冊	同十二錢
林學士星野愷之介君著	昆虫植物金石採集法	一冊	同十錢
明治女學校教師八木兼晨君著	和畵手本	四冊	同一圓
女學雜誌社編輯	演說著作材料	八冊	同四十錢
巖本善治君著	木村鐙子小傳	一冊	同八錢
調袋輪双紙	猫と鼠	一冊	同五錢

下六番町六番地
女學雜誌社

新年遣ひ物佳書



は面白き勸懲繪草紙にして第一子供にも分り易く大人にも敎へとなるべき意味ある書物なれば土產遣物としては無類のものに候

定價一冊五錢
郵送料二錢
女學雜誌社

明治女學校幼年科生の募集

明治女學校從來の預科は高等小學に當り、三年にて卒業す。此度び、其下に更に幼年科を新設し、小學尋常科に相當する同樣の敎育を施こす。家より通學しがたき幼兒は、本塾に預かり、一人づゝ女生の保姆を付して保護すべし。月謝三十錢、束脩を要せず、但し冬期は薪炭料五錢を要す

一月十五日より本校内別舍に於て開校し取締は一切本校にて擔任し敎師も亦本校より出敎す。幼き時より、本校の主義を以て敎育せんとを希ふ。有志の人は成べく早く申込まるべし

東京下六番町六番地
私立 明治女學校

○普く主に在る姉妹に告ぐ

我儕今般同志者と相謀り、高知女子傳道學會なる者を設立したり。其の目的は有志の婦女をして、特別に聖書を講窮し、傳道の方法を實習せしめんとするに在り。主に在て愛する姉妹諸君の陸續來學あらん事を冀望す。

但し本會の規則幷に學科課程を一見せられ度諸君は一片の端書を寄送あれ。

明治廿五年一月

高知女子傳道學會

發行所
東京市麴町區下六番町六番地
女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三